

全国学力・学習状況調査における中学校の英語の 実施に関する最終報告（素案） 基礎資料

1. 全国学力・学習状況調査等 について

1. 全国学力・学習状況調査の概要

1 調査の目的

- ・義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- ・学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- ・以上の取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査対象

小学校第6学年、中学校第3学年

3 調査内容

- ①教科に関する調査(国語A・B、算数・数学A・B) ※24年度・27年度は「理科」を追加。理科は3年に一度の実施
- ②生活習慣や学習習慣等に関する質問紙調査(児童生徒に対する調査／学校に対する調査)

2. 平成28年度調査【悉皆調査】

- 調査日: 本体調査 平成28年4月19日(火)
経年変化分析調査 平成28年5月16日から6月30日の期間中、調査の対象となった学校が実施可能な日時
- 国語、算数・数学の2教科での悉皆調査と抽出による経年変化分析調査を実施

3. 平成29年度調査【悉皆調査】

- 調査日: 平成29年4月18日(火)
- 国語、算数・数学を実施。

(参考) 全国学力・学習状況調査に関する決定等

- 教育再生実行会議第三次提言「これからの大学教育の在り方について」(平成25年6月28日)
『国は、全国学力・学習状況調査において理科の調査を定期的実施する』
- 第2期教育振興基本計画(平成25年6月14日閣議決定)
『全国学力・学習状況調査について、国として市町村や学校等の状況を把握するとともに、全ての市町村や学校等に、全国的な状況との比較による課題把握、指導改善等を行う機会を提供するため、全数調査を継続的に実施する。あわせて経年変化分析や経済的な面も含めた家庭の状況と学力等の状況の把握・分析等が可能な「きめ細かい調査」を組み入れるなど調査の充実を図る。また、調査結果を活用した教育委員会や学校等における教育施策や教育指導の充実・改善に向けた一層の取組を促す。』

(1) 調査内容

① 教科に関する調査(国語、算数・数学、理科)

主として「知識」に関する問題(A)	主として「活用」に関する問題(B)
<ul style="list-style-type: none"> ・身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容 ・実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能 <p style="text-align: right;">など</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力 ・様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力 <p style="text-align: right;">など</p>

※理科については、主として「知識」に関する問題と主として「活用」に関する問題を一体的に問う。

② 生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

児童生徒に対する調査	学校に対する調査
学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査 (例) 国語の勉強は好きですか、授業の内容はどの程度分かりますか、一日にテレビを見る時間、携帯電話等の使用時間、読書時間、勉強時間の状況 など	指導方法に関する取組や人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する調査 (例) 学力向上に向けた取組、指導方法の工夫、教育の情報化、教員研修、家庭・地域との連携状況 など

※理科については、主として「知識」に関する問題と主として「活用」に関する問題を一体的に問う。

(2) 時間割(平成27年度)

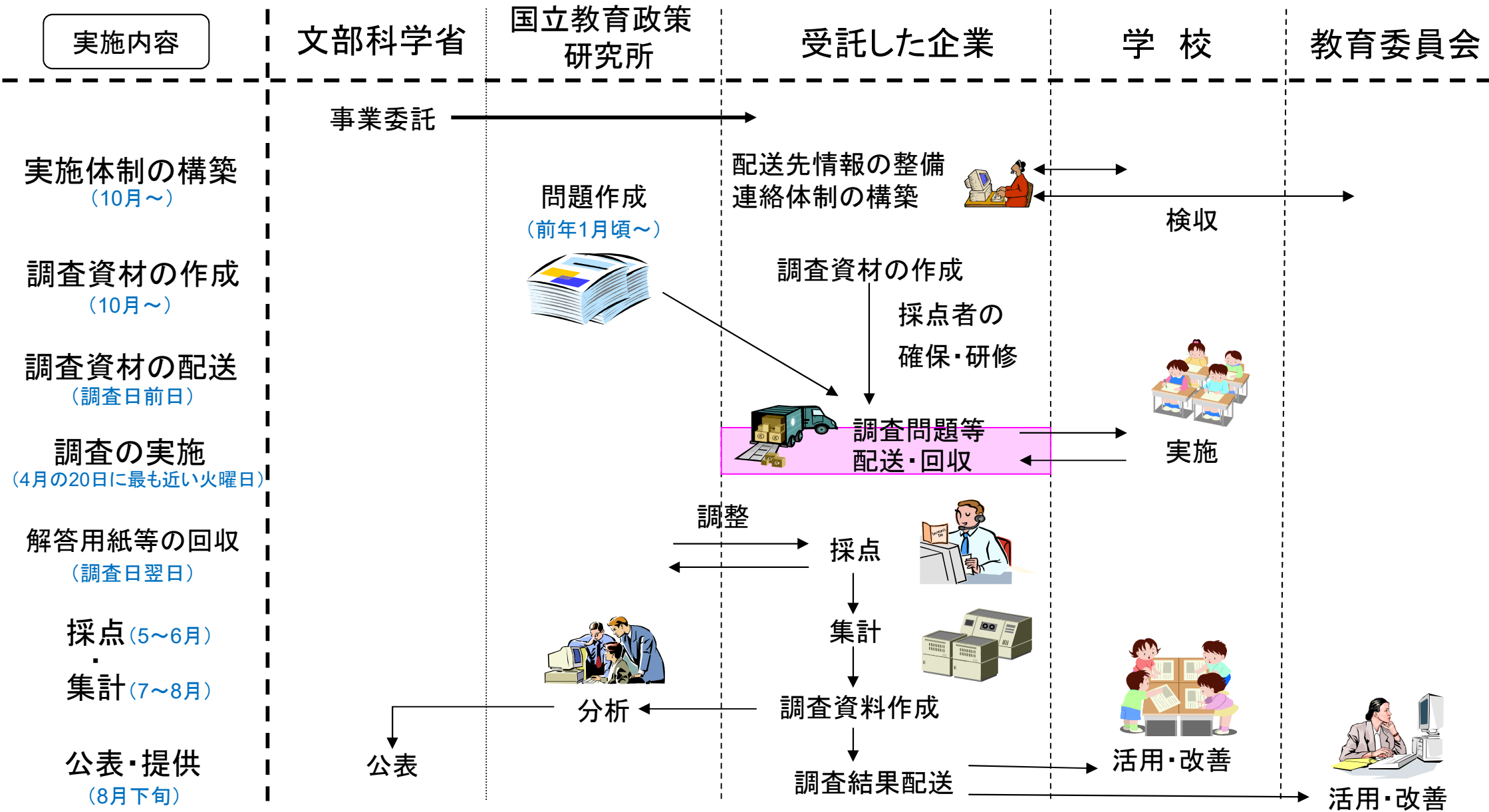
① 小学校(児童質問紙は、4時限目終了以降に、各学校の状況に応じて実施。)

1時限目	2時限目	3時限目	4時限目	
国語A(20分)、算数A(20分)	国語B(40分)	算数B(40分)	理科(40分)	児童質問紙(20分程度)

② 中学校(生徒質問紙は、5時限目終了以降に、各学校の状況に応じて実施。)

1時限目	2時限目	3時限目	4時限目	5時限目	
国語A(45分)	国語B(45分)	数学A(45分)	数学B(45分)	理科(45分)	生徒質問紙(20分程度)

全国学力・学習状況調査における全体の流れ



調査結果の概要

【聞くこと】

- 「応答問題」では、肯定的に決まった応答表現や、Where や Whoseを用いた疑問文に対する応答などにおいて、前回の同一問題の通過率を上回った。
- 所有代名詞や否定文で応えること、文形式ではなく内容に応じて応える問題、申し出や依頼に対する応答などは、定着が十分ではないと考えられる。
- 「詳細理解問題」では、数字の聞き取りや聞いた英語を視覚的に絵と結び付けやすい問題については、前回の同一問題の通過率を上回った。
- 前置詞の意味や後置修飾の意味のとらえ方、不定詞の理解、多くの情報を整理して理解することには課題があると考えられる。

【読むこと】

- 「詳細理解問題」では、文の意味内容が直接的に絵に結びつく問題は、前回の同一問題の通過率を上回った。
- 第3学年では設定通過率を上回るまたは同程度と考えられる問題数の合計が半数未満であった。特に、前置詞の理解、連語の意味、いくつかの情報を整理して正確に内容を読みとることなどにおいて課題がある。
- 「概要・要点理解問題」では、書かれた情報を整理して、発話の意図をとらえる問題は、前回の同一問題の通過率を下回った。
- 「言語使用に関する知識理解問題」で、日常的な慣用表現は定着が見られる。

【書くこと】

- 「トピック指定問題」では、まとまった内容の文章を書くことが弱く、通過率が設定通過率を下回った。be動詞と一般動詞の併用や、代名詞の変化ができていない誤答が目立つとともに、無解答率が高い。
- 「条件指定問題」では、例文を参考にして紹介文を書く問題や英語のメモをもとに手紙を完成させる問題で、前回の同一問題の通過率を上回った。
- 「文構造問題」では、where で始まる疑問文などの問題で、前回の同一問題の通過率を下回った。また、後置修飾、不定詞などの構造について課題がある。

「話すことに関する調査」を実施

- イラストを提示したり, 音声を聞かせたりして, 生徒の発話や応答を録音し, 評価。
 - 英語学習に対する意識や学習習慣などに関する質問紙調査も実施。
- 全国的に教育課程の実現状況を見るための, 「話すこと」に焦点を当てた調査は, 初めての試み

【調査対象】

- 調査対象学年中学校第3学年
- 調査実施期間平成17年11月～12月
- 調査実施学校数及び生徒数33校1,090人
- 調査内容
 - 「スピーキングテスト」
 - 質問紙調査(生徒及び教師)



結果のポイント

- 日常生活に関わる基本的な単語の発話及び発音は良好
- 相手の話しかけ(質問)に対し, 状況に即して適切に英語で応答する能力は, 定型表現を用いた応答については身に付いている。
- 自分の考えや気持ちなどが聞き手に伝わるように話す力に課題

平成22年度特定の課題に関する調査（英語：「書くこと」）抜粋

国立教育政策研究所

- 調査対象学年／中学校第3学年
- 調査実施日／平成22年11月8日～11月19日
- 調査実施学校数及び生徒数／101校（約3,300人）
全国の国公私立中学校から無作為抽出

調査結果における主な課題と指導の改善事項

調査結果における主な課題

指導の改善事項

①文字、符号の使い方、語と語の区切り 問題1…p.8

- 呼びかけの文において、符号「,」と「?」が必要となる位置を判断し、適切な符号を用いることができなかった生徒の割合は約7割

- 普段の指導の中で、文意や読み手を意識して符号を活用させる機会を増やすなど

②語と語のつながり（文の構造） 問題5…p.12,16

- 後置修飾（前置詞句の形容詞的用法）における語句整序の問題の通過率は約4割
- 疑問文や否定文をコミュニケーションの中で正しく使うことが十分身に付いているとはいえない

- 日本語との対比の中で語の配列の違いにふれながら書かせ、後置修飾を使って身の回りのものを表現させるなど
- 場面設定を明確にし、対話や文章のながれにふさわしい文形式や時制を考えさせるなど

①読んだ文章に関して自分の意見・感想を書く力 問題3…p. 23

● 読み取った内容に関して、書きたい内容を適切な語彙や文の構造が分からず書けなかった、と回答した生徒の割合は約3割

● 自分の意見・感想等を書くために必要となる語彙や文の構造等の知識を深めるとともに、読み取った文章中の表現を活用して書かせるなど

②資料・状況を基に自分の意向を正しく伝える文章を書く力 問題6…p. 27

● 与えられた資料・状況のみを基に（日本語の指示なし）内容を考えて書けた生徒の割合は約3割

● 自分の意向を伝える内容が書くことができたが、正しく伝わるように表現することができなかった生徒の割合は約2割

● マッピングを取り入れ思考の活性化を図った上で、アイデアの取捨選択を行わせるなど

● ペアやグループでメモや手紙の交換を行い、書かれた内容がどのように伝わっているのかを確かめさせるなど

③まとまった内容の文章を書く力 問題4・7…p. 30, 34

問題4

● 誤答には、文構造等の誤りを含むものが多い

問題7

● まとまりのある内容の文章を書けた生徒のうち、文と文のつながりを工夫して展開して書くことができなかった生徒の割合は約7割

● 文構造等を繰り返し指導したり、まとめて取り扱ったりして、理解の体系化を図り、適切な表現を選択させるなど

● 文の羅列に対して、内容に一貫性をもたせるように配列を考えるとともに、代名詞やつなぎ言葉などを効果的に使って文章にさせるなど

2. 学習評価の在り方について

観点別学習状況の評価について

- 学習評価には、児童生徒の学習状況を検証し、結果の面から教育水準の維持向上を保障する機能。
- 各教科においては、学習指導要領等の目標に照らして設定した観点ごとに学習状況の評価と評定を行う「目標に準拠した評価」として実施。
⇒きめの細かい学習指導の充実と児童生徒一人一人の学習内容の確実な定着を目指す。

学力の3つの要素と評価の観点との整理

【現行】

学習評価の4観点

関心・意欲・態度

思考・判断・表現

技能

知識・理解

【以下の3観点に沿った整理を検討】

学力の3要素 (学校教育法) (学習指導要領)

知識及び技能

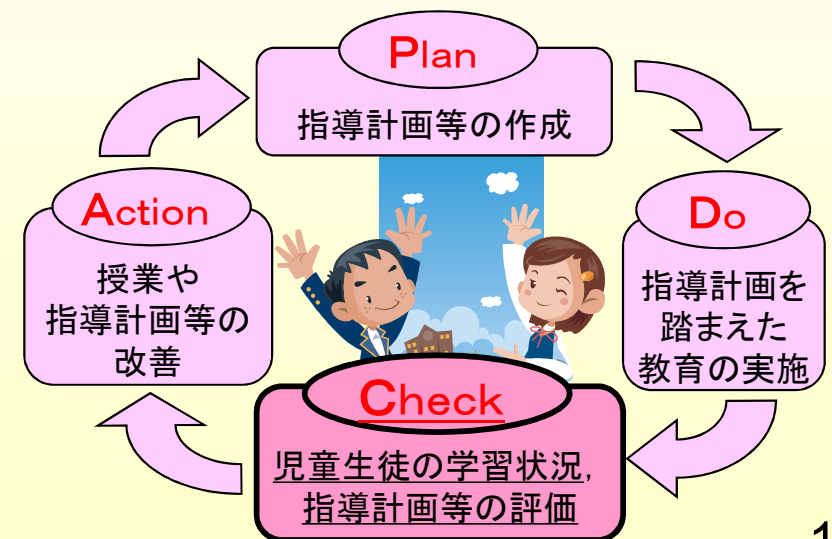
思考力・判断力
・表現力等

主体的に学習に
取り組む態度

学習指導と学習評価のPDCAサイクル

- 学習評価を通じて、学習指導の在り方を見直すことや個に応じた指導の充実を図ること、学校における教育活動を組織として改善することが重要。

指導と評価の一体化



多様な評価方法の例

児童生徒の学びの深まりを把握するために、多様な評価方法の研究や取組が行われている。

「パフォーマンス評価」

知識やスキルを使いこなす(活用・応用・統合する)ことを求めるような評価方法。論説文やレポート、展示物といった完成作品(プロダクト)や、スピーチやプレゼンテーション、協同での問題解決、実験の実施といった実演(狭義のパフォーマンス)を評価する。

「ルーブリック」

成功の度合いを示す数レベル程度の尺度と、それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を示した記述語(評価規準)からなる評価基準表。

項目	尺度	IV	III	II	I
項目		…できる …している	…できる …している	…できる …している	…できない …していない

記述語

ルーブリックのイメージ例

「ポートフォリオ評価」

児童生徒の学習の過程や成果などの記録や作品を計画的にファイル等を集積。そのファイル等を活用して児童生徒の学習状況を把握するとともに、児童生徒や保護者等に対し、その成長の過程や到達点、今後の課題等を示す。

学習評価の改善に関する今後の検討の方向性

各教科等の評価の観点のイメージ

<p>観点（例）</p> <p>※具体的な観点の書きぶりは、各教科等の特質を踏まえて検討</p>	<p>知識・技能</p>	<p>思考・判断・表現</p>	<p>主体的に学習に取り組む態度</p>
<p>各観点の趣旨のイメージ（例）</p> <p>※具体的な記述については、各教科等の特質を踏まえて検討</p>	<p>（例）</p> <p>〇〇を理解している／〇〇の知識を身に付けている</p> <p>〇〇することができる／〇〇の技能を身に付けている</p>	<p>（例）</p> <p>各教科等の特質に応じ育まれる見方や考え方をを用いて探究することを通じて、考えたり判断したり表現したりしている</p>	<p>（例）</p> <p>主体的に知識・技能を身に付けたり、思考・判断・表現をしようとしていたりしている</p>

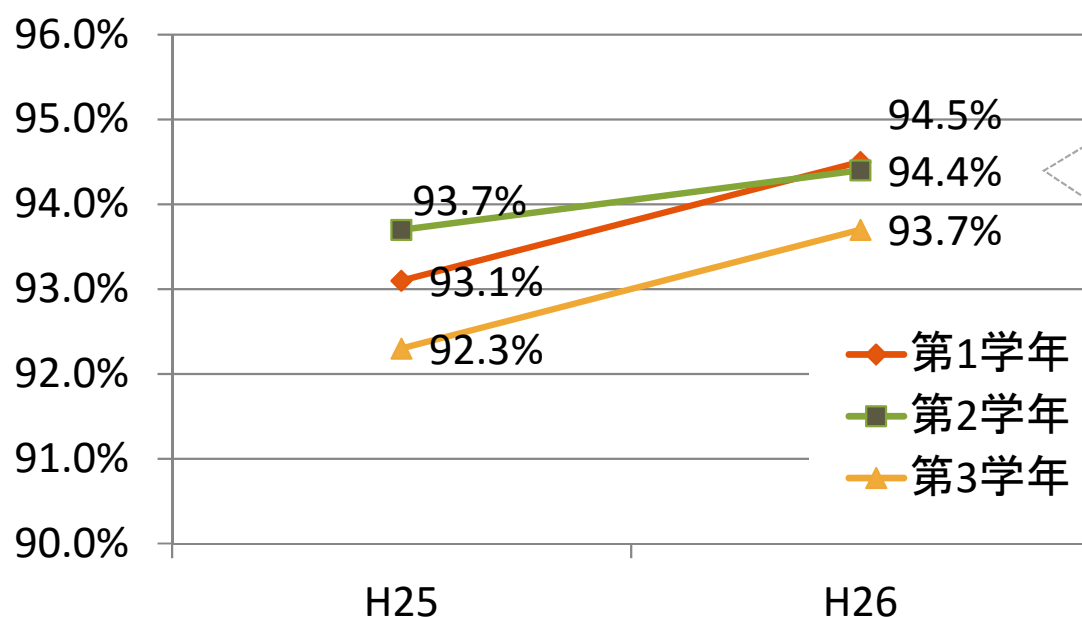
（出典）平成28年3月14日 総則・評価特別部会配付資料

英語 中学校におけるパフォーマンス等の評価の現状

- 「話すこと」や「書くこと」の能力を評価するスピーキングテストやライティングテスト等を実施している学校は、第1学年では94.5%で、平成25年度の93.1%から1.4ポイント上昇、第2学年では94.4%で、平成25年度の93.7%から0.7ポイント上昇、第3学年では93.7%で、平成25年度の92.3%から1.4ポイント上昇している。

パフォーマンステストの状況

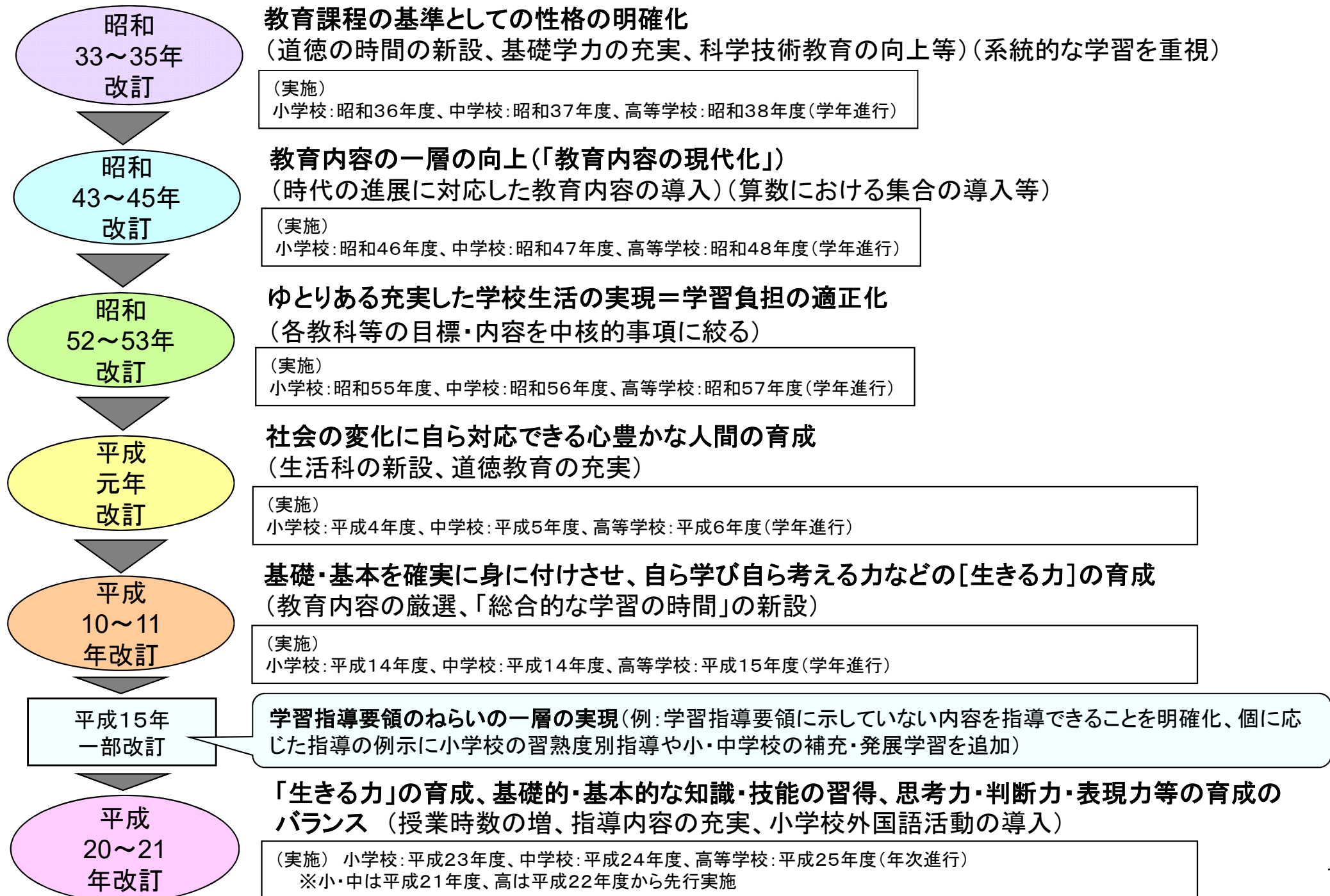
スピーキングテストやライティングテスト等のパフォーマンステストの実施状況



具体的な実施内容	
スピーキングテスト	スピーチ
	インタビュー(面接)
	プレゼンテーション
	ディスカッション
	ディベート
ライティングテスト(エッセイ等)	
その他	

3. 新しい学習指導要領等 が目指す姿

学習指導要領の変遷



「学力の三要素」と「生きる力」について

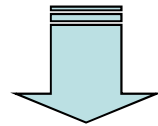
〈現行学習指導要領の理念〉

- 平成10～11年改訂の学習指導要領の理念は「生きる力」を育むこと
- 「知識基盤社会」の時代において「生きる力」を育むという理念はますます重要
- 教育基本法改正等により教育の理念が明確になるとともに、学校教育法改正により学力の重要な要素が規定

○ 学校教育法（昭和22年法律第26号）

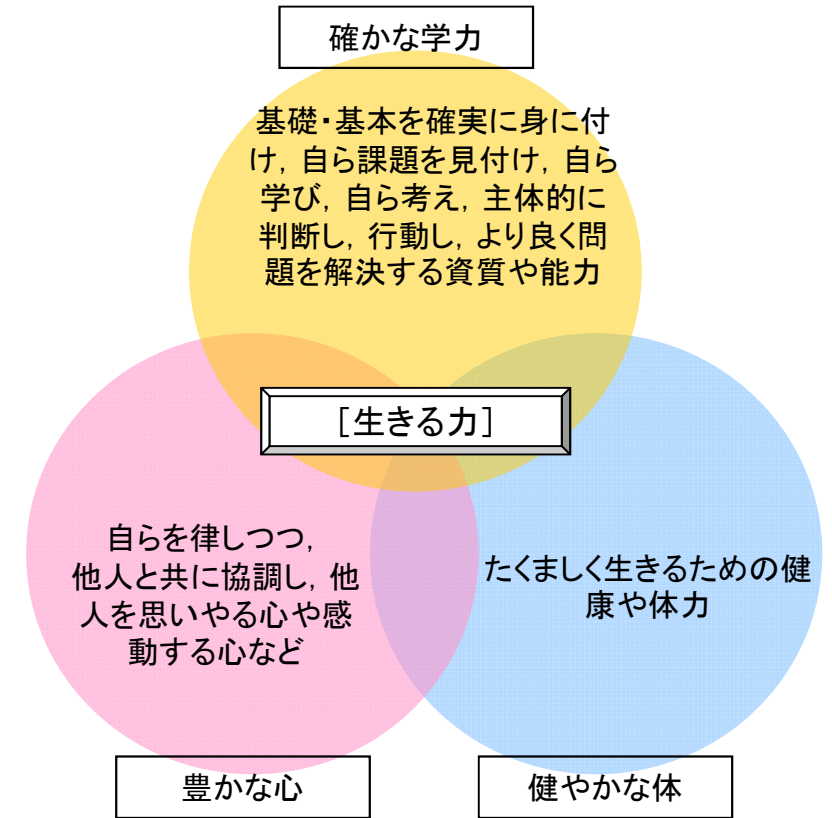
第30条（略）

- ② 前項の場合においては、生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。



現行学習指導要領においては、これまでの理念を継承し、教育基本法改正等を踏まえ、「生きる力」を育成

「ゆとり」か「詰め込み」かではなく、これからの社会において必要となる知・徳・体のバランスのとれた「生きる力」をより効果的に育成



言語活動の充実について①

現行学習指導要領では、「確かな学力」、特に「思考力・判断力・表現力等」を育み、各教科等の目標を実現するための手立てとして、言語活動の充実について規定

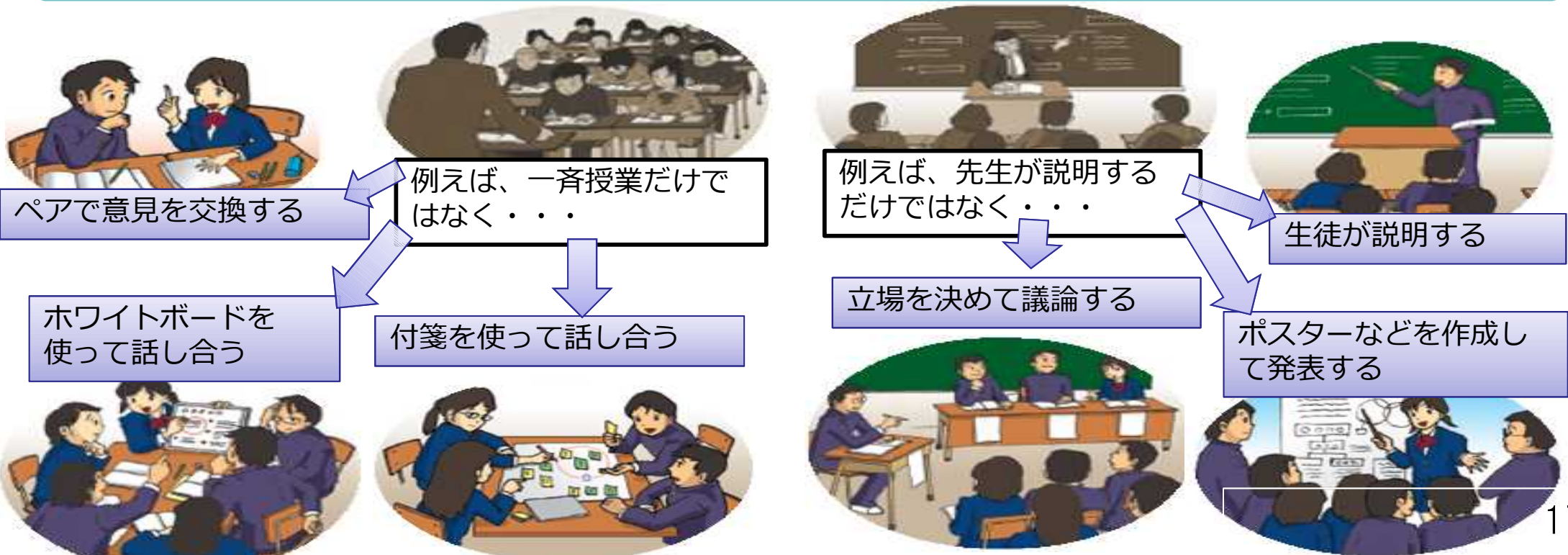
小学校学習指導要領 総則（中学校・高等学校においても同様）

第1 教育課程編成の一般方針

学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、児童に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。その際、児童の発達の段階を考慮して、児童の言語活動を充実するとともに、家庭との連携を図りながら、児童の学習習慣が確立するよう配慮しなければならない。

第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項

2(1) 各教科等の指導に当たっては、児童の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、児童の言語活動を充実すること。



言語活動の充実について②

～言語活動の検証・改善のための有識者との意見交換（平成26年10月10日,31日）より～

1. 言語活動の位置付け

- 習得、活用、探究のいずれの場面においても、**各教科における学習活動の基盤**となるのは言語の能力。**豊かな心を育むことや人間関係を形成**する上でも重要。
- 平成20年中央教育審議会答申では、思考力・判断力・表現力を育むために各教科に必要な学習活動の例として右の6点を示し、**これらの学習活動の基盤となるものは、広い意味での言語**であるとした。
- こうした力の育成は、**国語科だけでなく、すべての教科で取り込まれるべきもの**。現行学習指導要領において初めて求められたものではなく、従前から、国語科をはじめ各教科等において学習活動の重要な要素として取り込まれてきた。

思考力・判断力・表現力を育むために
各教科に必要な学習活動の例

- ①体験から感じ取ったことを表現する
- ②事実を正確に理解し伝達する
- ③概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする
- ④情報を分析・評価し、論述する
- ⑤課題について、構想を立て実践し、評価・改善する
- ⑥互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる

2. 成果と課題

<成果>

- 多くの小・中学校で言語活動を意識した活動に取り組んでいる
- 言語活動の充実が**児童生徒の学力の定着に寄与**している
(全国学力・学習状況調査の結果)

<課題>

- 言語活動についての**目的意識**や、教科等の**学習過程における位置づけが不明確**であったり、指導計画等に効果的に位置付けられていないことがある
 - ・単なる話合いにとどまり形骸化している例
 - ・言語活動を行うことが目的化している例 など
- 言語活動を行うことに負担を感じている教師や、**時間を確保することが困難と考**えている教師が少なくない

3. 言語活動の今後の方向性

- 各教科等の教育目標を実現するため、**見通しを立て、主体的に課題の発見・解決に取り組み、振り返るといった学習の過程において、言語活動を効果的に位置づけ、そのねらいを明確に示すことが必要**。アクティブ・ラーニングを構成する学習活動の要素を検討する際も、**言語が学習活動の基盤となるものであることを踏まえた検討が必要**。
 - ・「その活動で何を実現しようとするのか」という観点から、授業の中での言語活動の位置付けを一層明確にすること
 - ・数学的活動や、理科や社会などの問題解決的・探究的な活動など、各教科の学習の過程において、言語活動を効果的に位置付けること
 - ・言語活動が学びを深めるものとするためには、授業の冒頭に見通しを持たせ、最後に振り返りをするこの重要性について理解を徹底することが必要
- 言語活動により時数の確保が難しくなるという見方もあるが、**学年等を超えて長期的に言語活動を行う能力の育成を積み重ねていくことにより、一層効果的で効率的な学習が可能となるという視点も重要**。
継続して言語活動に取り組めることで、児童生徒の言語活動を行う能力が高くなるとともに、言語活動を意識することにより目標・内容と学習活動の関係が明確となり、言語活動を取り入れた方が従来よりも学習が早く進み、学習に要する時間が短縮できるという考え方を重視することが必要。
- 教員の資質向上も含め、**学校が全体として取組を進められるよう、教育委員会や大学等による支援や環境整備等を行いながら、今後さらなる充実が図られるようにしていくべき**である。

学習指導要領改訂の背景

人工知能が進化して、
人間が活躍できる職業は
なくなるのではないか。

今学校で教えていることは、
時代が変化したら
通用しなくなるのではないか。

子供たちに、情報化やグローバル化など急激な社会的変化の中でも、
未来の創り手となるために必要な資質・能力を
確実に備えることのできる学校教育を実現する。

よりよい学校教育を通じて、よりよい社会を作るという**目標を学校と社会が共有**して実現

社会や産業の構造が変化し、質的な豊かさが成長を支える成熟社会に移行していく中で、私たち人間に求められるのは、定められた手順を効率的にこなしていくにとどまらず、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかを考え、主体的に学び続けて自らの能力を引き出し、自分なりに試行錯誤したり、多様な他者と協働したりして、新たな価値を生み出していくことであるということ、そのためには生きて働く知識を含む、これからの時代に求められる資質・能力を学校教育で育成していくことが重要であるということを、学校と社会とが共通の認識として持つことができる好機にある。

学校教育のよさをさらに進化させるため、学校教育を通じて子供たちが身に付けるべき資質・能力や学べき内容などの全体像を分かりやすく見渡せる「**学びの地図**」として、**学習指導要領を示し、幅広く共有**

- これからの時代に求められる知識や力とは何かを明確にし、教育目標に盛り込む。これにより、子供が学びの意義や成果を自覚して次の学びにつなげたり、学校と地域・家庭とが教育目標を共有してカリキュラム・マネジメントが実現しやすくなる。
- 生きて働く知識や力を育む質の高い学習過程を実現するため、各教科における学びの特質を明確にするとともに、授業改善の視点（「アクティブ・ラーニングの視点」）を明確にする。これにより、教科の特質に応じた深い学びと、我が国の強みである「授業研究」を通じたさらなる授業改善が実現する。

「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」 諮問 (平成26年11月) の概要

趣旨

- ◆ 子供たちが成人して社会で活躍する頃には、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会や職業の在り方そのものも大きく変化する可能性。
- ◆ そうした厳しい挑戦の時代を乗り越え、**伝統や文化に立脚し、高い志や意欲を持つ自立した人間として、他者と協働しながら価値の創造に挑み、未来を切り開いていく力が必要。**

- ◆ そのためには、教育の在り方も一層進化させる必要。
- ◆ 特に、学ぶことと社会とのつながりを意識し、「何を教えるか」という知識の質・量の改善に加え、「どのように学ぶか」という、**学びの質や深まりを重視**することが必要。また、学びの成果として「どのような力が身に付いたか」という視点が重要。

審議事項の柱

1. 新しい時代に求められる資質・能力を踏まえた、初等中等教育全体を通じた改訂の基本方針、学習・指導方法の在り方（アクティブ・ラーニング）や評価方法の在り方等

2. 新たな教科・科目等の在り方や、既存の教科・科目等の目標・内容の見直し

○グローバル社会において求められる英語教育の在り方（小学校における英語教育の拡充強化、中・高等学校における英語教育の高度化）

○国家及び社会の責任ある形成者を育むための高等学校教育の在り方

- ・主体的に社会参画するための力を育てる新たな科目等
- ・日本史の必修化の扱いなど地理歴史科の見直し
- ・より高度な思考力等を育成する新たな教科・科目
- ・より探究的な学習活動を重視する視点からの「総合的な学習の時間」の改善
- ・社会的要請も踏まえた専門学科のカリキュラムの在り方など、職業教育の充実
- ・義務教育段階での学習内容の確実な定着を図るための教科・科目等 など

3. 各学校におけるカリキュラム・マネジメントや、学習・指導方法及び評価方法の改善支援の方策

⇒平成28年度中を目途に答申、2020年(平成32年)から順次実施予定

学習指導要領改訂の方向性

新しい時代に必要となる資質・能力の育成と、学習評価の充実

学びを人生や社会に生かそうとする
学びに向かう力・人間性の涵養

生きて働く知識・技能の習得

未知の状況にも対応できる
思考力・判断力・表現力等の育成

何ができるようになるか

よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、
社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む

「社会に開かれた教育課程」の実現

各学校における**「カリキュラム・マネジメント」**の実現

何を学ぶか

新しい時代に必要となる資質・能力を踏まえた 教科・科目等の新設や目標・内容の見直し

小学校の外国語教育の教科化、高校の新科目「公共」の新設など

各教科等で育む資質・能力を明確化し、目標や内容を構造的に示す

学習内容の削減は行わない※

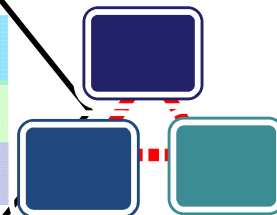
どのように学ぶか

主体的・対話的で深い学び（「アクティブ・ラーニング」）の視点からの学習過程の改善

生きて働く知識・技能の習得
など、新しい時代に求められる
資質・能力を育成

知識の量を削減せず、質の高い
理解を図るための学習過程
の質的改善

主体的な学び
対話的な学び
深い学び



※高校教育については、些末な事実に基づく知識の暗記が大学入学者選抜で問われることが課題になっており、そうした点を克服するため、重要用語の整理等を含めた高大接続改革等を進める。

学びに向かう力
人間性等

どのように社会・世界と関わり、
よりよい人生を送るか

「確かな学力」「健やかな体」「豊かな心」を
総合的にとらえて構造化

何を理解しているか
何ができるか

知識・技能

理解していること・できる
ことをどう使うか

思考力・判断力・表現力等

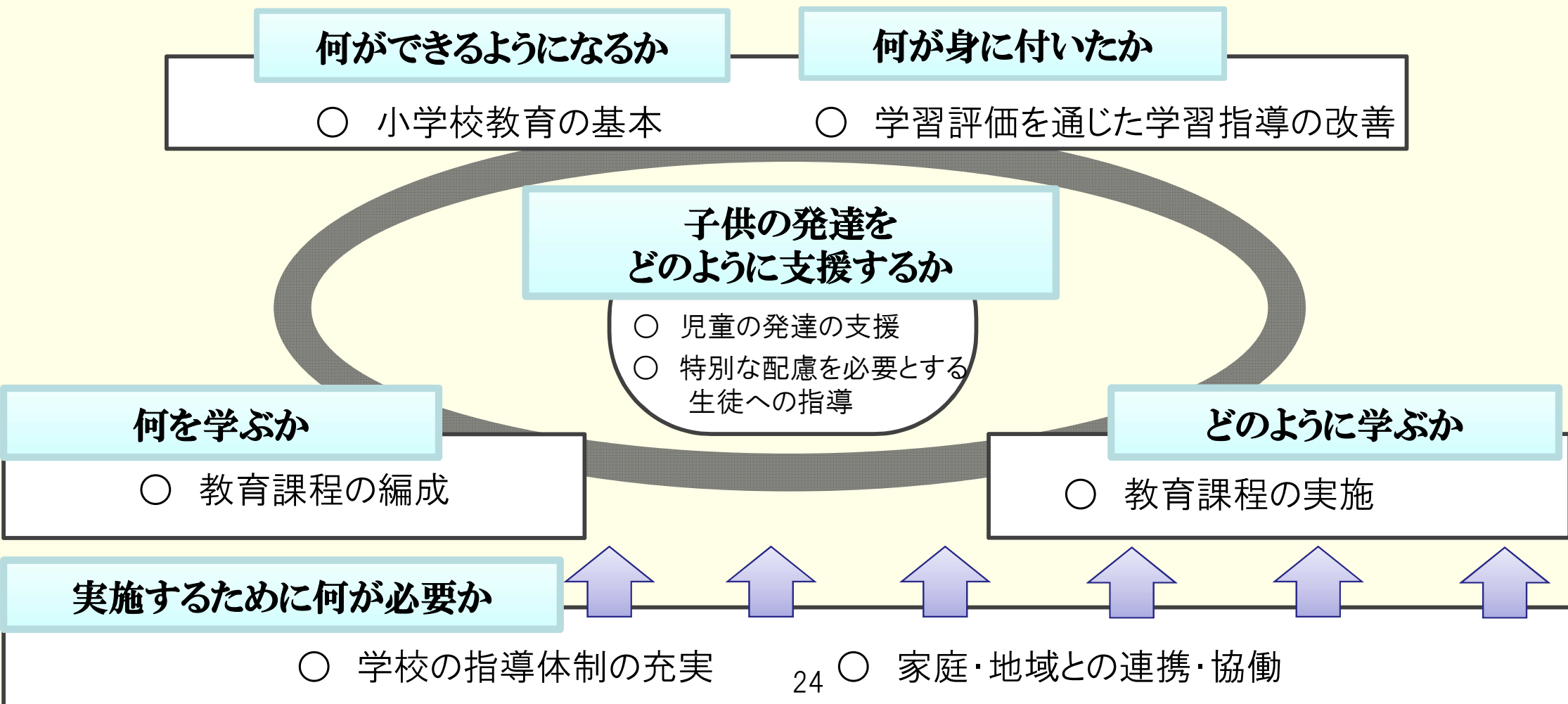
よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を学校と社会とが共有し、それぞれの学校において、必要な教育内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを明確にしながら、社会との連携・協働によりその実現を図っていく。

<社会に開かれた教育課程>

- ① **社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと。**
- ② **これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自分の人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育てていくこと。**
- ③ **教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること。**

学習指導要領総則の構造とカリキュラム・マネジメントのイメージ

教育課程の構造や、新しい時代に求められる資質・能力の在り方、アクティブ・ラーニングの考え方等について、すべての教職員が校内研修や多様な研修の場を通じて理解を深めることができるよう、「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」の視点から学習指導要領の要であり、教育課程に関する基本原則を示す「総則」を抜本的に改善し、必要な事項を分かりやすく整理。



「何ができるようになるか」、「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」の視点から、教育課程の理念や、新しい時代に求められる資質・能力の在り方、アクティブ・ラーニングの考え方等について、わかりやすく示すものとして抜本的に改善

【現行】

【改訂イメージ】

第1 教育課程編成の一般方針

- ・教育基本法等に示された目的・目標や、学力の3要素、道徳教育、体育・健康に関する指導など

第2 内容の取扱いに関する共通的事項

- ・発展的内容の指導、指導の順序の工夫、複式学級の取扱いなど

第3 授業時数の取扱い

- ・年間の授業日数(週数)、1単位時間の設定、弾力的な時間割など

第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項

1 学校の創意工夫を生かし、調和の取れた具体的な指導計画

- ・各教科、各学年間の相互の連携、まとめ方や重点の置き方に工夫した効果的な指導など

2 その他の配慮

- ・言語活動の充実、体験的な学習、問題解決的な学習、自主的・自発的な学習
- ・学級経営の充実、生徒指導の充実
- ・児童が見通しを立てたり振り返ったりする活動、学習課題の選択や自らの将来について考える機会
- ・個に応じた指導の充実、障害のある児童への指導、海外から帰国した児童等への適切な指導
- ・コンピュータ等の情報手段の活用、学校図書館の計画的な利用、読書活動の充実
- ・評価による指導の改善
- ・家庭や地域との連携、学校間の連携や交流、障害のある幼児児童生徒との交流及び共同学習、高齢者などとの交流の機会

前文

⇒「社会に開かれた教育課程」の実現など、改訂が目指す理念

第1 小学校教育の基本

何ができるようになるか

⇒ 教育基本法等に示された教育の目的・目標の達成に向けた教育課程の意義、「生きる力」の理念に基づく知・徳・体の総合的な育成、育成を目指す資質・能力、カリキュラム・マネジメントの実現

第2 教育課程の編成

何を学ぶか

⇒ 資質・能力を含めた学校教育目標に基づく教育課程の編成、学校段階間の接続、横断的に育成を目指す資質・能力、授業時数等の共通事項 など

第3 教育課程の実施と学習評価

どのように学ぶか、何が身に付いたか

⇒ 「主体的・対話的で深い学び」(アクティブ・ラーニングの視点)による資質・能力の育成、言語活動の充実やICTの活用など重要となる学習活動 など

第4 児童の発達を踏まえた指導

子供の発達をどのように支援するか

⇒ 学級経営、生徒指導、キャリア教育の充実 など
特別支援教育、日本語指導など特別な配慮必要とする児童への指導

第5 学習活動の充実のための学校運営上の留意事項

⇒ 学校の指導体制の充実、家庭・地域との連携・協働

実施するために何が必要か

第6 道徳教育推進上の配慮事項

⇒ 全体計画の作成、道徳教育推進教師、指導内容の重点化 など

主体的・対話的で深い学びの実現（「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善）について（イメージ）

「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業改善を行うことで、学校教育における質の高い学びを実現し、子供たちが学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けるようにすること

【主体的な学び】

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「**主体的な学び**」が実現できているか。

【対話的な学び】

子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「**対話的な学び**」が実現できているか。

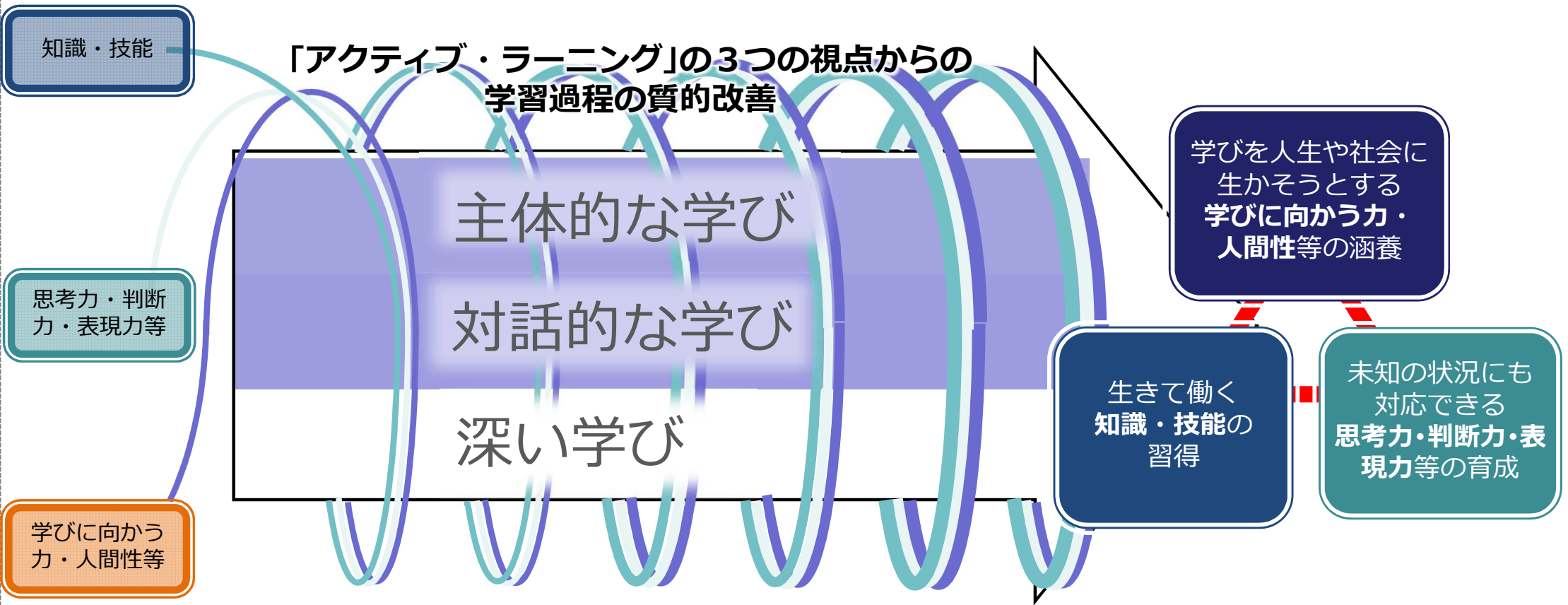
【深い学び】

習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「**深い学び**」が実現できているか。

資質・能力の育成と

主体的・対話的で深い学び（「アクティブ・ラーニング」の視点）の関係（イメージ）

- ◆ 「アクティブ・ラーニング」の3つの視点を明確化することで、授業や学習の改善に向けた取組を活性化することができる。これにより、知識・技能を生きて働くものとして習得することを含め、育成を目指す資質・能力を身につけるために必要な学習過程の質的改善を実現する。
- ◆ 資質・能力は相互に関連しており、例えば、習得・活用・探究のプロセスにおいては、習得された知識・技能が思考・判断・表現において活用されるという一方通行の関係ではなく、思考・判断・表現を経て知識・技能が生きて働くものとして習得されたり、思考・判断・表現の中で知識・技能が更新されたりすることなども含む。



※ 基礎的・基本的な知識・技能の習得に課題が見られる場合においても、「深い学び」の視点から学習内容の深い理解や動機付けにつなげたり、「主体的な学び」の視点から学びへの興味や関心を引き出すことなどが重要である。

主体的・対話的で深い学びの実現 （「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善）について（イメージ）

「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を行うことで、学校教育における質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けるようにすること

【主体的な学び】

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「**主体的な学び**」が実現できているか。

【例】

- 学ぶことに興味や関心を持ち、毎時間、見通しを持って粘り強く取り組むとともに、自らの学習をまとめ振り返り、次の学習につなげる
- 「キャリア・パスポート（仮称）」などを活用し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりする



主体的な学び
対話的な学び
深い学び

学びを人生や社会に
生かそうとする
学びに向かう力・
人間性等の涵養

生きて働く
知識・技能の
習得

未知の状況にも
対応できる
思考力・判断力・表現力
等の育成



【対話的な学び】

子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「**対話的な学び**」が実現できているか。

【例】

- 実社会で働く人々が連携・協働して社会に見られる課題を解決している姿を調べたり、実社会の人々の話を聞いたりすることで自らの考えを広げる
- あらかじめ個人で考えたことを、意見交換したり、議論したり、することで新たな考え方に気が付いたり、自分の考えをより妥当なものとしたりする
- 子供同士の対話に加え、子供と教員、子供と地域の人、本を通して本の作者などとの対話を図る



【深い学び】

習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「**深い学び**」が実現できているか。

【例】

- 事象の中から自ら問いを見だし、課題の追究、課題の解決を行う探究の過程に取り組む
- 精査した情報を基に自分の考えを形成したり、目的や場面、状況等に応じて伝え合ったり、考えを伝え合うことを通じて集団としての考えを形成したりしていく
- 感性を働かせて、思いや考えを基に、豊かに意味や価値を創造していく



4. 学習指導要領の理念を実現するために必要な方策（英語関係）

外国語教育に関する現状について

外国語教育の現状・課題

①学年が上がるにつれて英語の学習意欲に課題。4技能、特に発信能力(話す、書く)に課題。

- ・小学校5,6年生の72.3%、中学1年生の60.2%が「英語の授業が好き」と回答。【H26年度小学校外国語活動実施状況調査】
 - ・高校3年生の58.3%が「英語の学習が好きではない」と回答。【H26年度英語教育改善のための英語力調査】
 - ・生徒の英語力について、4技能全般、特に「話すこと」と「書くこと」の能力が課題。高校3年生はCEFR(ヨーロッパ言語共通参照枠)A1(英検3~5級程度)の上位~A2(英検準2級程度)の下位レベルが多い。【H26年度英語教育改善のための英語力調査】
- (参考)「第2期教育振興基本計画」に掲げる成果目標
中学校卒業段階:英検3級程度以上、高等学校卒業段階:英検準2級~2級程度以上を達成している中高生の割合:50%。
⇒達成状況:中学3年生:約34.7%、高校3年生:約31.9%

②小学校高学年で「読む」「書く」も含めた言語活動への知的要求が高まっている

③校種間の接続が十分とは言えない

- ・中学1年生の約8割が、小学校で「英単語・文を読む」「英単語・文を書く」ことをもってしておきかたと回答。【H26年度小学校外国語活動実施状況調査】
- ・小中連携したカリキュラムの作成に取り組んでいる中学校区の割合:13.1%
- ・中高連携に取り組んでいる学校の割合:31.3% 【H26年度英語教育実施状況調査】

④自分の意見や考えを話したり書いたりすることができると思う生徒の割合が低く、またそのような指導をしていると考える教員の割合も低い

- ・「エッセイなど、ある程度まとまりのある文章を書くことができる、ほぼできている」と回答した中学2年生の割合:33.6%
- ・「ディベートやディスカッションをすることができる、ほぼできている」と回答した中学2年生の割合:20.7%
- ・授業における言語活動の指導状況について、「よく行う、時々行う」と回答した中学校外国語科担当教員の割合:スピーチ:56.6%、プレゼンテーションやスキット(寸劇):36.0%、ディベート、ディスカッション:34.7%

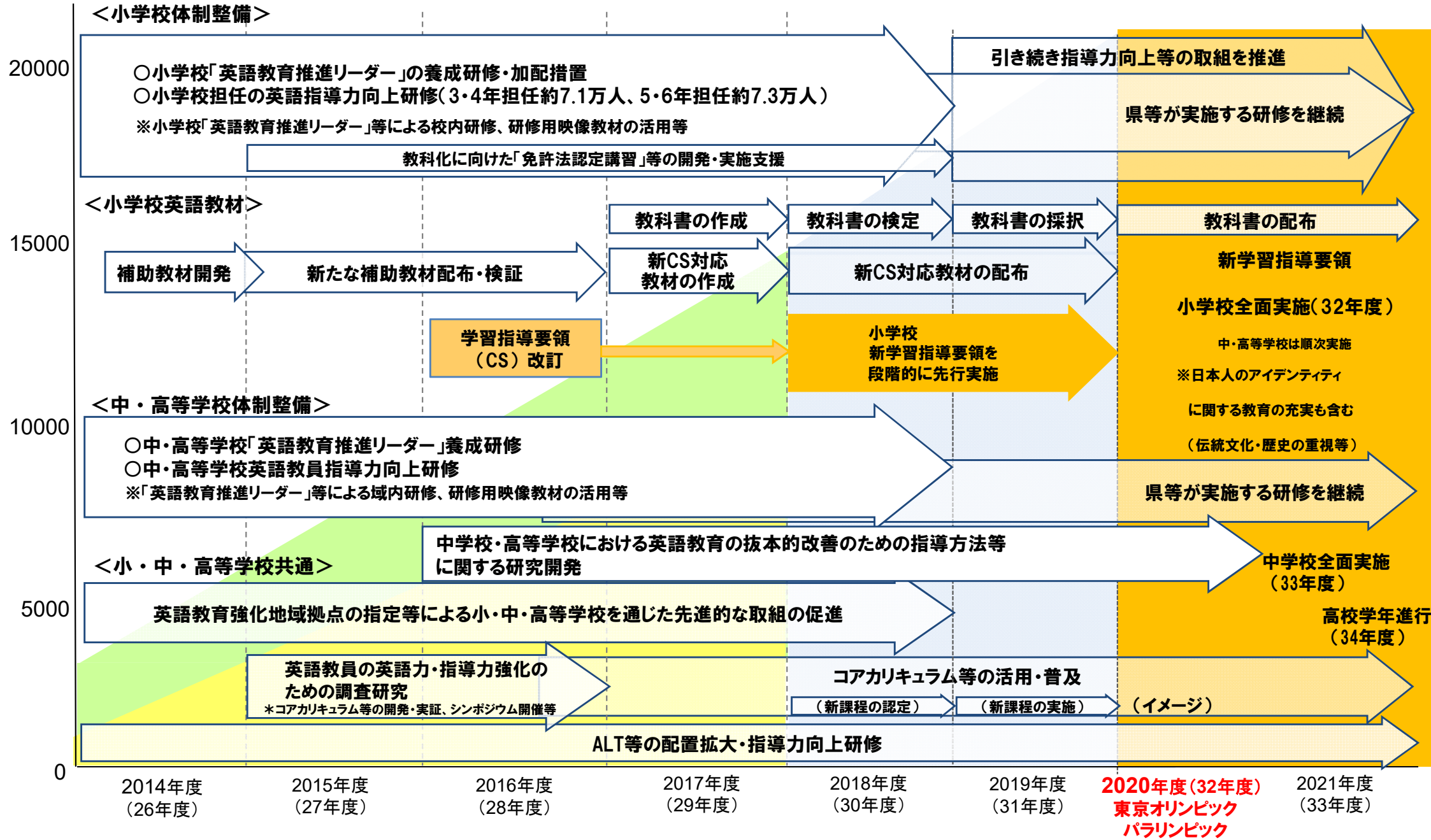
【H26年度小学校外国語活動実施状況調査】

⑤「読んだ内容に基づいて書く」など技能統合型の言語活動を行っている生徒ほどスコアが高い

- ・4技能を効果的に活用した技能統合型の言語活動が十分ではない。特に、聞いたり読んだりしたことに基づいて英語で話し合ったり意見交換をしたりする経験(35.2%)や、ディベートやディスカッションの経験(17.3%)があると同等した高校3年生の割合は少ない。一方、試験結果が高い生徒(高校3年生)ほど、技能統合型の言語活動を行っている割合が高い。【H26年度英語教育改善のための英語力調査】※()内の数値は、高校3年生が第2学年のときに「よくしていたと思う、どちらかといえばしていたと思う」と回答した割合。

グローバル化に対応した英語教育改革実施計画スケジュール(イメージ)

(小学校数)



国が定める標準授業時数に上乗せして実施する小学校

研究開発学校・教育課程特例校(現行の教育課程の基準によらない)

新学習指導要領(小学校英語)の先行実施

今後の英語教育の改善・充実方策について 報告（概要）

～グローバル化に対応した英語教育改革の5つの提言～

英語教育の在り方に関する有識者会議 平成26年9月

- 文部科学省の「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」（平成25年12月）の具体化のため、平成26年2月～9月に9回開催（そのほか計5回の小委員会を開催）。
- 改革のうち、教育課程や教員養成等については、中央教育審議会等における全体的な議論の中で更に検討を要する。

改革を要する背景

- グローバル化の進展の中で、国際共通語である英語力の向上は日本の将来にとって極めて重要である。アジアの中でトップクラスの英語力を目指すべき。今後の英語教育改革においては、その基礎的・基本的な知識・技能と、それらを活用して主体的に課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成は重要な課題。
- 我が国の英語教育は、現行の学習指導要領を受けた改善も見られるが、特にコミュニケーション能力の育成について更なる改善を要する課題も多い。東京オリンピック・パラリンピックを迎える2020（平成32）年を見据え、小・中・高を通じた新たな英語教育改革を順次実施できるよう検討を進める。並行して、これに向けた準備期間の取組や、先取りした改革を進める。

改革1. 国が示す教育目標・内容の改善

- 学習指導要領では、小・中・高を通して①各学校段階の学びを円滑に接続させる、②「英語を使って何ができるようになるか」という観点から一貫した教育目標（4技能に係る具体的な指標の形式の目標を含む）を示す（資料参照）（具体的な学習到達目標は各学校が設定）。
- 高等学校卒業時に、生涯にわたり「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能を積極的に使えるようになる英語力を身に付けることを目指す。あわせて、生徒の英語力を把握し、きめの細かな指導の改善・充実や生徒の学習意欲の向上につなげるため、従来から設定されている英語力の目標（学習指導要領に沿って設定される目標（中学校卒業段階：英検3級程度以上、高等学校卒業段階：英検準2級程度から2級程度以上）を達成した中・高生の割合50%）だけでなく、高等学校段階の生徒の特性・進路等に応じた英語力、例えば、高等学校卒業段階で、英検2～準1級、TOEFL iBT60点前後以上等を設定し、生徒の英語力の把握・分析・改善を行うことが必要。
 - ・ 小学校： 中学年から外国語活動を開始し、音声に慣れ親しませながらコミュニケーション能力の素地を養うとともに、ことばへの関心を高める。高学年では身近なことについて基本的な表現によって「聞く」「話す」ことなどに加え、「読む」「書く」の態度の育成を含めたコミュニケーション能力の基礎を養う。学習の系統性を持たせるため教科として行うことが求められる。小学校の英語教育に係る授業時数や位置づけなどは、今後、教育課程の全体の議論の中で更に専門的に検討。
 - ・ 中学校： 身近な話題についての理解や表現、簡単な情報交換ができるコミュニケーション能力を養う。文法訳読に偏ることなく、互いの考えや気持ちを英語で伝え合うコミュニケーション能力の養成を重視する。
 - ・ 高等学校： 幅広い話題について発表・討論・交渉などを行う言語活動を豊富に体験し、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を高める。

改革2. 学校における指導と評価の改善

- 英語学習では、失敗を恐れず、積極的に英語を使おうとする態度を育成することが重要。中学校・高等学校では、主体的に「話す」「書く」などを通じて互いの考えや気持ちを英語で伝え合う言語活動を展開することが重要。
また、生徒が英語に触れる機会を充実し、中学校の学びを高等学校へ円滑につなげる観点から、中学校においても、生徒の理解の程度に応じて、授業は英語で行うことを基本とする。
- 各学校は、学習指導要領を踏まえながら、4技能を通じて「英語を使って何ができるようになるか」という観点から、学習到達目標を設定（例：CAN-DO形式）し、指導・評価方法を改善。併せて主体的な学びにつながる「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」を重視し、観点別学習状況の評価において、例えば、「英語を用いて～ができる」とする観点を「英語を用いて～しようとしている」とした評価を行うことによって、生徒自らが主体的に学ぶ意欲や態度などを含めた多面的な評価方法等を検証・活用。
- 小学校高学年で教科化する場合、適切な評価方法については先進的取組を検証し、引き続き検討。

改革3. 高等学校・大学の英語力の評価及び入学者選抜の改善

- 生徒の4技能の英語力・学習状況の調査・分析を行い、その結果を、教員の指導改善や生徒の英語力の向上に生かす。
- 入学者選抜における英語力の測定は、4技能のコミュニケーション能力が適切に評価されることが必要。
- 各大学等のアドミッション・ポリシーとの整合性を図ることを前提に、入学者選抜に、4技能を測定する資格・検定試験の更なる活用を促進。
そのため、学校、テスト理論等の専門家、資格・検定試験の関係団体等からなる協議会を設置し、
 - ・適切な資格・検定試験の情報提供、
 - ・指針づくり（学習指導要領との関係、評価の妥当性、換算方法、受験料・場所、適正/公正な実施体制等）、
 - ・試験間の検証、英語問題の調査・分析・情報提供等の取組を早急に進めることが必要。
- 「達成度テスト」の具体的な検討を行う際には、連絡協議会の取組を参考に英語の資格・検定試験の活用の在り方も含め検討。

改革4. 教科書・教材の充実

- 小学校高学年で教科化する場合、学習効果の高いICT活用も含め必要な教材等を開発・検証・活用。
- 主たる教材である教科書を通じて、説明・発表・討論等の言語活動により、思考力・判断力・表現力等が一層育成されるよう、次期学習指導要領改訂においてそのような趣旨を徹底するとともに、教科用図書検定基準の見直しに取り組む。
- 国において音声や映像を含めた「デジタル教科書・教材」の導入に向けた検討を行う。
- ICT予算に係る地方財政措置を積極的に活用し、学校の英語授業におけるICT環境を整備。

改革5. 学校における指導体制の充実

- 地域の大学・外部専門機関との連携による研修等の実施や、地域の指導的立場にある教員が英語教育担当指導主事や外部専門家等とチームを組んで指導に当たることなどにより、地域全体の指導体制を強化。
地域の中心となる英語教育推進リーダー等の養成、定数措置などの支援が必要。
- 各学校では、校長のリーダーシップの下で、英語教育の学校全体の取組方針を明確にし、中核教員等を中心とした指導体制の強化に取り組むことが重要。
- 小学校の学びを中学校へ円滑に接続させるため、小中連携の効果が期待される相互乗り入れ授業、カリキュラムづくり、指導計画作成などを行う合同研修など実質的な連携促進が必要。
- 小学校の中学年では、主に学級担任が外国語指導助手（ALT）等とのティーム・ティーチングも活用しながら指導し、高学年では、学級担任が英語の指導力に関する専門性を高めて指導する、併せて専科指導を行う教員を活用することにより、専門性を一層重視した指導体制を構築。
小学校教員が自信を持って専科指導に当たることが可能となるよう、「免許法認定講習」開設支援等による中学校英語免許状取得を促進。
英語指導に当たる外部人材、中・高等学校英語担当教員等の活用を促進。
- 2019（平成31）年度までに、すべての小学校でALTを確保するとともに、生徒が会話、発表、討論等で実際に英語を活用する観点から中・高等学校におけるALTの活用を促進。
- 大学の教員養成におけるカリキュラムの開発・改善が必要。
例えば、
 - ・小学校における英語指導に必要な基本的な英語音声学、英語指導法、ティーム・ティーチングを含む模擬授業、教材研究、小・中連携に対応した演習や事例研究等の充実、
 - ・中・高等学校において授業で英語によるコミュニケーション活動を行うために必要な英語音声学、第2言語習得理論等を含めた英語学、4技能を総合的に指導するコミュニケーションの科目の充実等を、英語力・指導力を充実する観点から改善することが必要。今後、教員養成の全体の議論の中で検討。同時に、小学校の専科指導や中・高等学校の言語活動の高度化に対応した現職教員の研修を確実に実施。

外国語教育の抜本的強化のイメージ

平成28年12月21日
中央教育審議会答申
別添資料

新たな外国語教育

大学や海外、社会で英語力などを伸ばす基盤を確実に育成

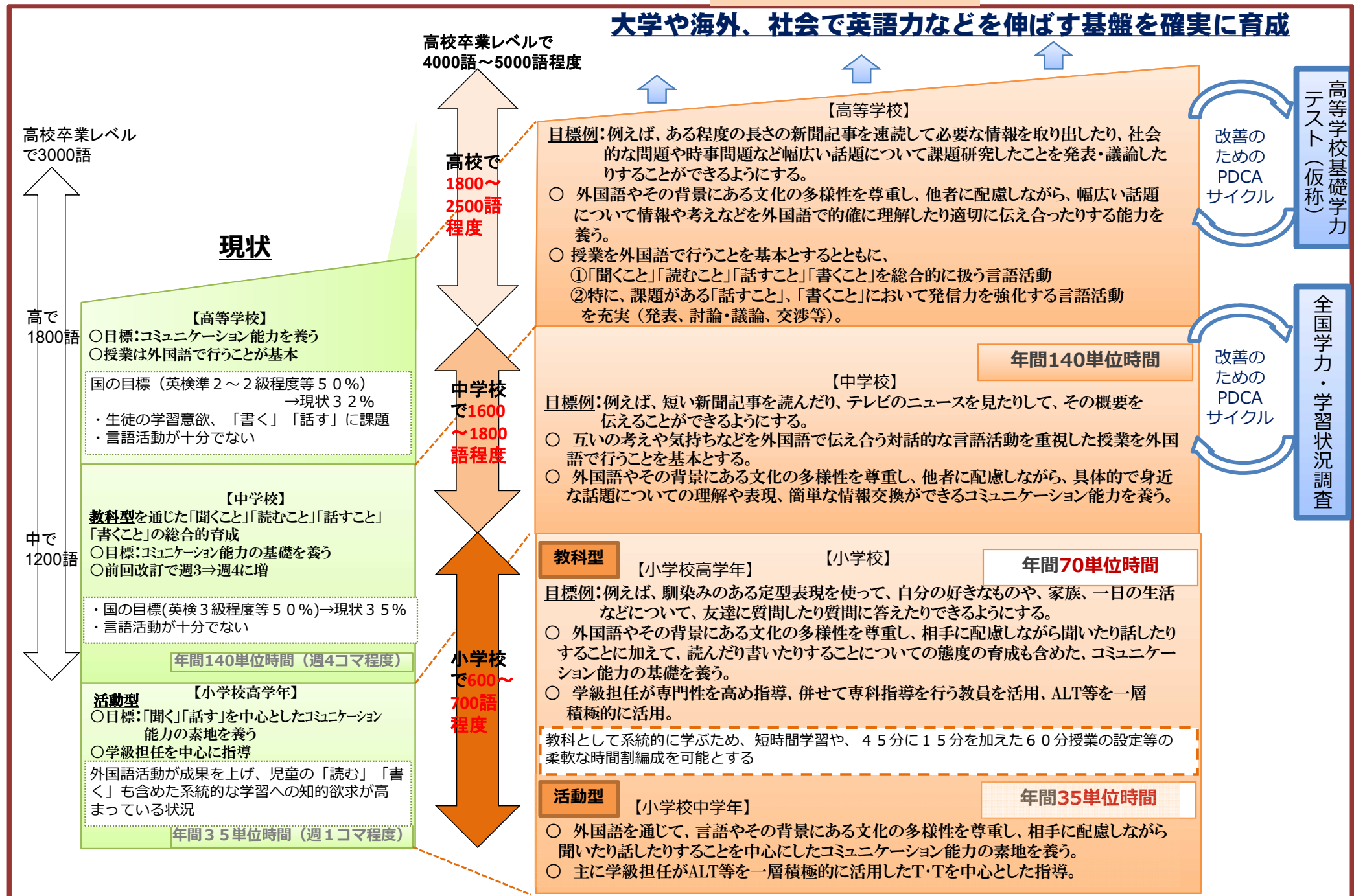
CEFR

B2

B1

A2

A1



※CEFRとは、シラバスやカリキュラムの手引きの作成、学習指導教材の編集のために、透明性が高く分かりやすく参照できるものとして、20年以上にわたる研究を経て、2001年に欧州評議会(Council of Europe)が発表。

「外国語」等における小・中・高等学校を通じた国の領域別の目標（イメージ）たたき台

平成28年12月21日
中央教育審議会答申
別添資料

複数の力を統合的に扱う言語活動を通して求められる英語力を身に付ける

校種	CEFR レベル	聞くこと	読むこと	話すこと (やり取り)	話すこと (発表)	書くこと
高等学校	B2	<ul style="list-style-type: none"> ○母語話者同士による多様な話題の長い会話を聞いて、概要や要点を理解できるようにする。 ○身近な話題に関する複雑な流れの議論を聞いて、話の展開を理解できるようにする。 ○自然な速さで話される時事問題や社会問題に関する長い説明を聞いて、概要や要点を理解できるようにする。 ○ある程度知識のある社会問題や時事問題に関するラジオ番組やテレビ番組を視聴して、概要や要点を理解することができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○関心のある分野の記事や資料から、必要な情報を読み取ることができるようにする。 ○興味のある現代小説や随筆を読んで、概要を理解することができるようにする。 ○時事問題や社会問題に関する記事やレポート、資料を読んで、概要や要点、筆者の姿勢や視点を理解できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○幅広い話題に関する会話に参加し、情報や自分の意見などを適切かつ流暢に表現することができるようにする。 ○知識のある時事問題や社会問題について、幅広い表現を用いて議論することができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○幅広い話題について、即興で、説明したり自分の考えや気持ちなどを話したりすることができるようにする。 ○幅広い分野のテーマについて、明瞭かつ詳細な説明をすることができる。 ○多様な考え方ができる時事問題や社会問題について、様々な見方の長所・短所を示すとともに、自分の意見を幅広い表現を用いて論理的に説明することができるようにする。 ○聴衆の反応に応じて、発表の内容や方法を調整することができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○関心のある分野のテーマについて、事実や情報などを明確且つ詳細に伝える説明文を書くことができるようにする。 ○時事問題や社会問題など幅広い話題に関する記事や資料を読んで、その概要や要点を書いてまとめることができるようにする。 ○時事問題や社会問題など幅広い話題について、得た情報を活用しながら、自分の意見やその理由を論理的に書くことができるようにする。 ○Eメール、エッセイ、レポートなどをそれぞれの用途に合った文体で書くことができるようにする。
	B1	<ul style="list-style-type: none"> ○身近な話題や知識のある社会的な話題に関する短い会話を聞いて、概要や要点を理解することができるようにする。 ○比較的ゆっくりはっきりと話されれば、時事問題や社会問題に関する短い平易な説明を聞いて、要点を理解することができるようにする。 ○比較的ゆっくりはっきりと話されれば、馴染みのある話題を扱ったラジオ番組やテレビ番組を視聴して、要点を理解できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○身近な話題に関する比較的短い記事やレポート、資料から、必要な情報を読み取ることができるようにする。 ○短い物語を読んで、あらすじを理解することができるようにする。 ○社会的な話題に関する短い会話や説明を読んで、概要や要点を理解できるようにする。 ○英語学習を目的として書かれた記事やレポートを読んで、概要や要点を理解できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○公共の場所(店、駅など)において、自分の問題を説明し、解決することができるようにする。 ○身近な話題や興味関心のある事柄について、準備をしないで会話に参加することができるようにする。 ○身近な話題や知識のある話題について、簡単な英語を用いて情報や意見を交換することができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○身近な話題や関心のある事柄について、即興で説明することができるようにする。 ○身近な話題や関心のある事柄について、まとまりのある内容を話すことができるようにする。 ○関心のある分野のテーマに関する記事やレポート、資料の概要や要点を説明することができるようにする。 ○知識のある時事問題や社会問題について、内容を具体的に説明するとともに、自分の意見を加えて話すことができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の経験や身近な事柄について、複数のパラグラフから成る説明文を書くことができるようにする。 ○関心のある分野のテーマに関する記事や資料を読んで、その概要や要点を書いてまとめることができるようにする。 ○関心のある分野のテーマについて、まとまりのある文章で具体的に説明するとともに、自分の意見やその理由を加えて書くことができるようにする。
	A2	<ul style="list-style-type: none"> ○短い簡単なメッセージやアナウンスを聞いて、必要な情報を聞き取ることができるようにする。 ○身近な話題に関する短い会話を聞いて、概要や要点を理解することができるようにする。 ○ゆっくりはっきりと話されれば、身近な事柄に関する短い説明の要点を理解することができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○日常生活において身の回りにある短い平易なテキストから、必要な情報を読み取ることができるようにする。 ○平易な英語で書かれた短い物語を読んで、あらすじを理解できるようにする。 ○身近な話題に関して平易な英語で書かれた短い説明や手紙を読んで、概要や要点を理解できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○日常生活や自分に関連した事柄に関する短い簡単なやりとりをすることができるようにする。 ○身近な話題や興味関心のある事柄について、ある程度準備をすれば、会話に参加することができるようにする。 ○身近な話題について、簡単な英語を用いて簡単な意見交換をすることができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○身近な事柄や出来事について、簡単な単語や文を用いて即興で話すことができるようにする。 ○身近な話題や関心のある事柄について、簡単な説明をすることができるようにする。 ○身近な話題について、自分の意見やその理由を簡単に話すことができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○自分が必要とする事柄について、短い簡単なメモやメッセージなどを書くことができるようにする。 ○身近な事柄について、簡単な単語や表現を用いて、短い説明文を書くことができるようにする。 ○聞いたたり読んだりした内容について、簡単な単語や表現を用いて、自分の意見や感想を書くことができるようにする。
	A1	<ul style="list-style-type: none"> ○挨拶や簡単な指示を聞いて理解することができるようにする。 ○日常生活において必要となる基本的な情報を聞き取ることができるようにする。 ○ゆっくりはっきりと話されれば、身の回りの事柄に関する平易でごく短い会話や説明を、視覚情報などを参考にしながら理解することができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○日常生活において身の回りにある英語の中の単語や単純な文を理解できるようにする。 ○平易な英語で書かれたごく短い物語を読んで、視覚情報などを参考にしながら、あらすじを理解することができるようにする。 ○身の回りの事柄に関して平易な英語で書かれたごく短い説明を読んで、視覚情報などを参考にしながら、概要を理解することができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○相手の発話を理解できない場合など、必要に応じて、聞き返したり意味を確認したりすることができるようにする。 ○相手のサポート(ゆっくり話す、繰り返す、言い換える、自分が言いたいことを表現するのに助け船をだしてくれる など)があれば、ごく身近な話題について、簡単な表現を使って質疑応答をすることができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○簡単な単語や文を用いて、自分について話すことができるようにする。 ○日常生活において必要となる基本的な情報を伝えることができるようにする。 ○ごく身近な事柄や出来事について、事実、自分の考えや気持ちなどを、簡単な単語や文を用いて短く話すことができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○自分に関するごく限られた情報を、簡単な単語や文を用いて書くことができるようにする。 ○ごく身近な事柄について、簡単な単語や文を用いて書くことができるようにする。
小学校	(Pre-A1)	<ul style="list-style-type: none"> ○アルファベットの発音を聞いて、どの文字であるかが分かるようにする。 ○挨拶や短いごく簡単な指示を聞いて理解することができるようにする。 ○ゆっくりはっきりと、繰り返し話されれば、自分に関することや身近で具体的な事物を表わすごく簡単な単語や文を聞き取ることができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ごく身近にあるアルファベットの文字を識別し、発音することができるようにする。 ○音声で十分に慣れ親しんだ、ごく身近で具体的な事物を表わす単語を見て、その意味を理解できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○挨拶やごく短い簡単な指示に応答することができるようにする。 ○相手のサポート(ゆっくり話す、繰り返す、言い換える、自分が言いたいことを表現するのに助け船をだしてくれる など)があれば、自分に関することについてごく簡単な質問に答えることができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○定型表現を用いて、簡単な挨拶をすることができるようにする。 ○自分や身の回りの物事に関するごく限られたことについて、簡単な単語や文を用いて話すことができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○目的を持ってアルファベットの大字と小文字を活字で書くことができるようにする。 ○例文を参考にしながら、音声などで十分慣れ親しんだ単語や文を書き写すことができるようにする。

※CEFRとは、シラバスやカリキュラムの手引きの作成、学習指導教材の編集のために、透明性が高く分かりやすく参照できるものとして、20年以上にわたる研究を経て、2001年に欧州評議会（Council of Europe）が発表。

高等学校における英語科目の改訂の方向性として考えられる構成

平成28年12月21日
中央教育審議会答申
別添資料

外国語
現行科目

コミュニケーション英語基礎

コミュニケーション英語Ⅰ
(必修)

コミュニケーション英語Ⅱ

コミュニケーション英語Ⅲ

英語表現Ⅰ

英語表現Ⅱ

英語会話

課題

- 生徒の英語力について、「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」全般、特に「話すこと」と「書くこと」の能力が課題
- 英語の学習意欲に課題
- 言語活動、特に、統合型の言語活動（例：聞いたり読んだりしたことに基づいて話したり書いたりする活動）が十分ではない
- グローバル時代において、英語学習に関する生徒の多様化への対応が必要

発信力が弱い

育成を
目指す
資質・能力等

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、他者を尊重し、聞き手・話し手・読み手・書き手に配慮しながら、コミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図るとともに、日常的な話題から時事問題や社会問題まで幅広い話題について、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝え合ったりする能力を養う

「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」の総合型
(必修科目を含む)の科目を核とする

発信能力の育成をさらに強化する

英語による思考力・判断力・表現力を高める見直し

英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ

- 「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」を総合的に育成（受信・発信のバランス）
- 明確な目標（英語を用いて何ができるようになるか）を達成するための構成・内容
- 複数の力を統合させた言語活動が中心
- 「英コミュⅠ」は中学校段階での学習の確実な定着（高等学校への橋渡し）を含む。

学習指導要領に掲げられる資質・能力を確実に育成するための指標形式の目標を段階的に設定

論理・表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

- 「話すこと」「書くこと」を中心とした発信力の強化
- スピーチ、プレゼンテーション、ディベート、ディスカッションなどの言語活動が中心
- 聞いたり読んだりして得た情報や考えなどを活用してアウトプットする統合型の言語活動

併せて専門教科「英語」の各科目も見直し
⇒ 総合英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、ディベート&ディスカッションⅠ・Ⅱ、エッセー・ライティングⅠ・Ⅱ

改訂の方向性

生徒が実社会や実生活の中で、自らが課題を発見し、主体的・協働的に探求し、英語で考えや気持ちを互いに伝え合うことを目的とした学習

Ⅰ↓Ⅲへ内容の高度化・話題の多様化

5. 英語教育の改善・充実について

現行学習指導要領(外国語活動・外国語科)の概要

基本的考え方

○小中高を通じて、**コミュニケーション能力を育成。**

- 言語や文化に対する理解を深める
- 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する
- 「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能をバランスよく育成する

○指導語彙を充実(中高を通じて 2, 200語 から 3, 000語 に)

I. 小学校学習指導要領(平成20年3月改訂)(平成23年度から実施)

- 平成23年度より、**5・6年生において、外国語活動を週1コマ導入。**平成21年度及び22年度は、学校の判断により先行実施が可能。教科としては位置づけず(成績評価は文章による記述)。
- 音声や基本的な表現に慣れ親しむことを中心
- 学級担任または外国語を担当する教員による実施が中心(ネイティブ・スピーカーや外国語に堪能な地域の人々の協力)

II. 中学校学習指導要領(平成20年3月改訂)(平成24年度から実施)

- 各学年の授業時数を**週3コマから週4コマ(約3割増)へ充実**
- 従前の「聞く」「話す」を重視した指導から**4技能のバランス取れた指導への改善**
- 指導語彙を900語から1, 200語へ充実

III. 高等学校学習指導要領(平成21年3月改訂)(平成25年度から年次進行で実施)

- 選択必修から「コミュニケーション英語Ⅰ」の共通必修に変更する等、科目構成を変更
- 生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は生徒の理解の程度に応じた**英語を用いて行うことを基本とする**ことを明示
- 指導語彙を1, 300語から1, 800語へ充実(※)

(※) コミュニケーション英語Ⅰ、Ⅱ及びⅢを履修した場合。

現行学習指導要領（中学校）（平成24年度～）の取組について

平成24年度より、中学校に現行学習指導要領を導入後、

- 中学校教員：英語の授業で「発話をおおむね英語で行っている」、「発話の半分以上を英語で行っている」と答えた教員を合わせて **1年生 58.3%、2年生 56.9%、3年生 54.8%**
- 中学校生徒：英語授業における生徒の英語による言語活動時間の割合は「おおむね言語活動を行っている」と「半分以上の時間言語活動を行っている」を合わせて **1年生 69.1%、2年生 66.0%、3年生 62.6%**
- 学習到達目標：「CAN-DOリスト」の形で学習到達目標を設定している学校数の割合は **平成27年度 51.1%**
など、教員が授業を英語で展開し、生徒の英語による言語活動が授業の中心になってきているとともに、各中学校において「CAN-DOリスト」の形で明確な学習到達目標を設定しつつある傾向が見られる。

「平成27年度公立中学校・中等教育学校（前期課程）における英語教育実施状況調査」

<授業改善の事例>

- 秋田県大仙市立大曲中学校
メモに基づいたスピーキング指導
 - ・「読むこと」「話すこと」の授業改善
 - ・「即興力」の重視
- 和歌山県有田市立初島中学校
考えながら話す言語活動
 - ・単元目標と学習到達目標との関連付け
- 静岡県裾野市立東中学校
小学校・高等学校との連携
 - ・連携を生かした授業改善
 - ・高等学校と連携した学習到達目標の設定
- 北海道弟子屈町立弟子屈中学校
年間指導計画における工夫
 - ・「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標を冒頭に配置
 - ・各単元の目標と関連する学習到達目標の明示

「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標設定に関わる取組事例

- 島根県教育委員会
学習到達目標を県内全中学校で設定
 - 県版「ガイドブック」の作成・配付
 - 指導主事による各学校への支援
- 青森県教育委員会
年間指導計画のフォーマットを提示
 - 各単元の目標と「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標との関連を明記するものに
- 沖縄県教育委員会
教育事務所レベルで「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標設定のための研修を実施
 - 年間指導計画の見直しからスタート
(各単元の目標を「能力」の面で1点に絞り込み)

秋田県大仙市立大曲中学校

I 学校・地域における教育活動

1. 言語活動における「即興力」の育成

- ・「話すこと」についてスモールステップを踏んだ指導
- ・メモに基づいたスピーキング指導
- ・二種類以上の技能を統合した指導
- ・「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標に「即興力」を設定

2. 英語科教員のチームワークづくり

- ・「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標設定
- ・方向目標の共有化

技能	レベル	学習到達目標
聴き取り	A	短い音声録音の大意を理解できる。
	B	短い音声録音の主旨を理解できる。
	C	短い音声録音の要旨を理解できる。
話し言葉	A	簡単な状況で、簡単な文で話せる。
	B	簡単な状況で、簡単な文で話せる。
	C	簡単な状況で、簡単な文で話せる。
読解	A	簡単な文章の大意を理解できる。
	B	簡単な文章の主旨を理解できる。
	C	簡単な文章の要旨を理解できる。
書き言葉	A	簡単な状況で、簡単な文で書ける。
	B	簡単な状況で、簡単な文で書ける。
	C	簡単な状況で、簡単な文で書ける。

3. 地域全体での指導力・評価力の向上

- ・拠点校が方向性と実践事項を提案、協力校で焦点化された項目を共通実践

II 成果・効果

- ・「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標設定により、授業計画が立てやすくなった。
- ・生徒と教員が目標を共有することで、生徒がより意欲的に学習に取り組むようになった。
- ・ドリル中心の活動が減り、生徒の発話量が増えた。
- ・拠点校・協力校制度により、拠点校と協力校で差を生じさせることなく、取り入れた手法の効果の波及が期待できる。

島根県教育委員会

I 島根県の中学校外国語教育の現状

- ・「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標についての理解が不十分
- ・評価場面で、その単元でめざす力が適切に評価されていない。
- ・旧態依然とした授業が行われている学校が少なくない。
- ・小規模学校が多く、外国語科教員が1名の学校が多い。
- ・新たな研修を実施することが難しい。

II 学習目標設定に向けた学校への支援

- ・学習到達目標の作成を通じて、「4技能を総合的に指導すること」や「指導と評価の改善」につながることへの理解
- ・作成ガイドの作成、研修、6月末に県内全校作成完了(予定)

III 成果・効果

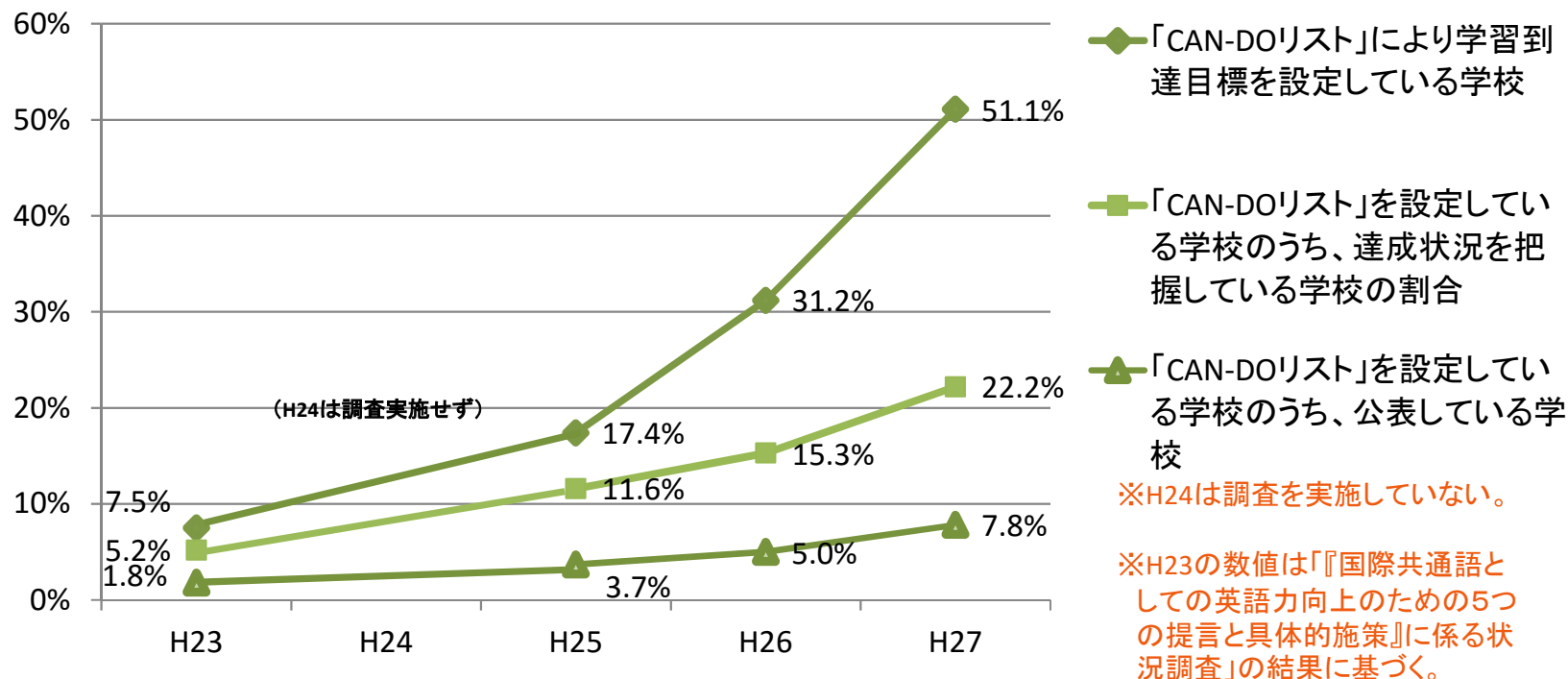
○教員の意識変容

- ・単元のねらいが明確になり、何を指導して、何を評価したら良いか明確になった。
- ・単元計画が立てやすくなった。
- ・年間を通して4技能をバランスよく指導し、評価できるようになった。
- ・授業の言語活動が充実し、生徒が意欲的になった。
- ・校内で作成し、英語教員同士で情報を共有したり改善したりする機会になった。 等

各学校における学習到達目標（「CAN-DOリスト」）の設定

- 「CAN-DOリスト」により学習到達目標を設定している学校は51.1%で、平成23年度の7.5%から43.6ポイント上昇、平成26年度の31.2%から19.9ポイント上昇している。
- 「CAN-DOリスト」により学習到達目標を設定している学校のうち、22.2%の学校では、設定した学習到達目標の達成状況を把握しており、平成23年度の5.2%から17ポイント上昇、平成26年度の15.3%から6.9ポイント上昇している。

「CAN-DOリスト」による学習到達目標の設定・公表・達成状況の把握



●平成27年度に「CAN-DOリスト」を100%設定している都道府県数 →11

●研修、モデルの提示等教育委員会が実施

※H24は調査を実施していない。

※H23の数値は『国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策』に係る状況調査の結果に基づく。

出典：「英語教育実施状況調査」（H27年）

平成27年度 生徒・教員の英語力及び指導状況について

■生徒の英語力について、目標としている英語力を達成している

生徒は公立中学3年生で約36.6%(約34%)、公立高校3年生で約34.3%(約32%)

○中学校卒業段階：初歩的な英語を聞いたり読んだりして話し手や書き手の意向などを理解したり、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話したり書いたりすることができる。(英検であれば3級程度以上)

○高等学校卒業段階：英語を通じて、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりすることができる。(英検であれば準2級～2級程度以上)

■英語教員の英語力についても、目標を達成している教員は

公立中・高それぞれ約30.2%及び約57.3%。

○生徒の英語によるコミュニケーション能力を育成するため、生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とすることができる。(英検準1級以上、TOEFLのPBT550点以上、CBT213点以上、iBT80点以上またはTOEIC730点以上)

■授業中、発話を半分以上英語で行っている英語教員は、公立中学校3年生担当で

約54.8%、公立高校3年生(コミュニケーション英語Ⅰ)担当で約49.6%。

■「CAN-DOリスト」により学習到達目標を設定している学校は、公立中・高それぞれ約

51.1%(31.2%)及び約69.6%(58.3%)。

※「CAN-DOリスト」とは、英語を使って実際にどのようなことができるようになるのか、その能力を記述したものを指す。

◆ 第2期教育振興基本計画（平成25年6月14日閣議決定）（抜粋）

成果目標5（社会全体の変化や新たな価値を主導・創造する人材等の養成）

「社会を生き抜く力」に加えて、卓越した能力※を備え、社会全体の変化や新たな価値を主導・創造するような人材、社会の各分野を牽引するリーダー、グローバル社会にあって様々な人々と協働できる人材、とりわけ国際交渉など国際舞台で先導的に活躍できる人材を養成する。

これに向けて、実践的な英語力をはじめとする語学力の向上、海外留学者数の飛躍的な増加、世界水準の教育研究拠点の倍増などを目指す。

※能力の例：国際交渉できる豊かな語学力・コミュニケーション能力や主体性、チャレンジ精神、異文化理解、日本人としてのアイデンティティ、創造性など

【成果指標】

＜グローバル人材関係＞

①国際共通語としての英語力の向上

・学習指導要領に基づき達成される英語力の目標（中学校卒業段階：英検3級程度以上、高等学校卒業段階：英検準2級程度～2級程度以上）を達成した中高校生の割合50%

②英語教員に求められる英語力の目標（英検準1級、TOEFL iBT80点、TOEIC730点程度以上）を達成した英語教員の割合（中学校：50%、高等学校：75%）

◆ 今後の英語教育の改善・充実方策について 報告

（H26年9月26日 英語教育の在り方に関する有識者会議）（抜粋）

生徒の英語力の目標については、「第2期教育振興基本計画」（平成25年6月14日閣議決定）において、中学校卒業段階で英検3級程度以上、高等学校卒業段階で英検準2級程度～2級程度以上を達成した中高生の割合を50%とすることとされている。この実現に向けて取り組むとともに、高等学校卒業時に、生涯にわたり「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能を積極的に使えるようになる英語力を身に付けることを目指す。

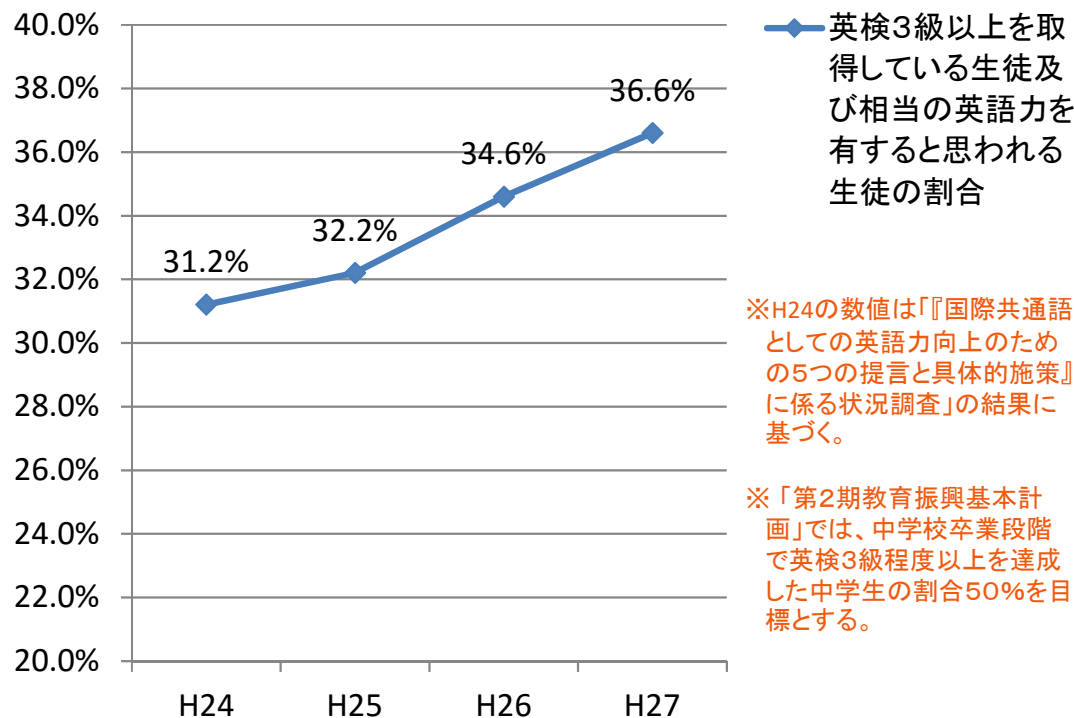
あわせて、生徒の英語力の目標を設定し、調査による把握・分析を行い、きめ細かな指導改善・充実、生徒の学習意欲の向上につなげる。これまでに設定されている英語力の目標だけでなく、高校生の特性・進路等に応じて、高等学校卒業段階で、例えば英検2級から準1級、TOEFL iBT60点前後以上等を設定し、生徒の多様な英語力の把握・分析・改善を行うことが必要。

<中学校>

中学生の英語力の状況

- 中学校第3学年に所属している生徒のうち、英検3級以上を取得している生徒は18.9%で、平成26年度の18.4%から0.5ポイント上昇している。
- 英検3級以上を取得してはいないが、相当の英語力を有すると思われる生徒は17.7%で、平成26年度の16.3%から1.4ポイント上昇している。
- 両者を合わせると36.6%となり、平成26年度の34.6%から2ポイント上昇している。

中学生の英語力の状況

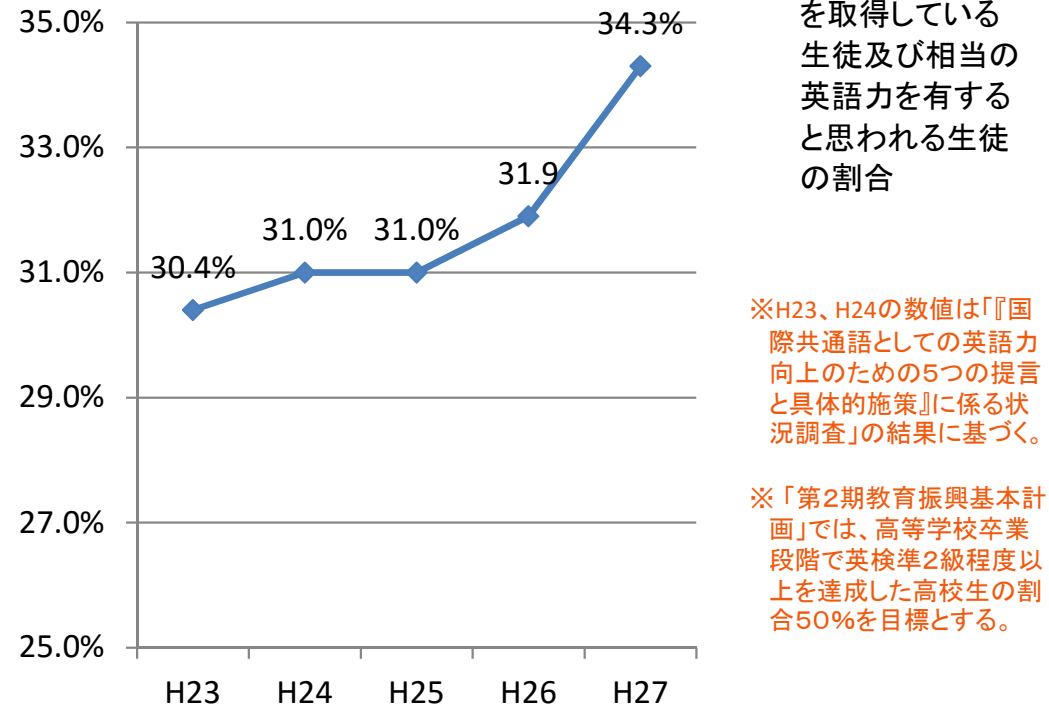


<高等学校>

高校生の英語力の状況

- 高等学校第3学年に所属している生徒のうち、英検準2級以上を取得している生徒は11.5%で、平成26年度の11.1%から0.4ポイント上昇している。
- 英検準2級以上を取得してはいないが、相当の英語力を有すると思われる生徒は22.8%で、平成26年度の20.8%から2.0ポイント上昇している。
- 両者を合わせると34.3%となり、平成26年度の31.9%から2.4ポイント上昇している。

高校生の英語力の状況



(参考) 平成27年度中学3年生の英語力について (アンケート調査より)

英検3級程度 (CEFR : A1レベル上位) の生徒が約3割

英検3級程度以上 (CEFR : A1レベル上位) の公立中学校3年の生徒数について教育委員会を通じてアンケートを実施

23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
30%	31%	31%	35%	36%

【中学校及び中等教育学校 (前期課程)】

	中学校第3学年に所属している生徒数…(a)	(a)の内、英検を受験したことがある生徒数…(b)	(b)の内、英検3級以上を取得している生徒数…(c)	(a)の内、英検3級以上相当の英語力を有すると思われる生徒数 [(c)以外]…(d)	(c)と(d)の計
生徒数及び割合	1,074,886人 (1,078,270人)	381,307人 (356,841人)	202,816人 (198,182人)	190,155人 (175,417人)	392,971人 (373,599人)
	((a)に占める割合)→	35.5% (33.1%)	18.9% (18.4%)	17.7% (16.3%)	36.6% (34.6%)

注) 「英検3級以上相当の英語力を有すると思われる生徒数」とは、英検3級以上は取得していないが、相当の英語力を有していると英語担当教員が判断する生徒の人数を指す。

出典：「英語教育実施状況調査」(H27年)

平成27年度高校3年生の英語力について（アンケート調査より）

英検準2～2級程度（CEFR：A2～B1レベル）の生徒が約3割

英検準2級～2級程度以上（CEFR：A2～B1レベル）の公立高校3年の生徒数について教育委員会を通じてアンケートを実施

23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
30%	31%	31%	32%	34%

【高等学校及び中等教育学校（後期課程）】

	高等学校第3学年に所属している生徒数…(a)	(a)の内、英検を受験したことがある生徒数…(b)	(b)の内、英検準2級以上を取得している生徒数…(c)	(a)の内、英検準2級以上相当の英語力を有すると思われる生徒数[(c)以外]…(d)	(c)と(d)の計
普通科等	705,328 人 (707,511人)	230,685 人 (230,300人)	77,980 人 (74,141人)	160,486 人 (146,465人)	238,466 人 (220,606人)
	((a)に占める割合)→	32.7% (32.6%)	11.1% (10.5%)	22.8% (20.7%)	33.8% (31.2%)
英語教育を主とする学科	7,031 人 (9,300人)	5,038 人 (6,967人)	3,886 人 (5,172人)	2,245 人 (2,845人)	6,131 人 (8,017人)
	((a)に占める割合)→	71.7% (74.9%)	55.3% (55.6%)	31.9% (30.6%)	87.2% (86.2%)
合計	712,359 人 (716,811人)	235,723 人 (237,267人)	81,866 人 (79,313人)	162,731 人 (149,310人)	244,597 人 (228,623人)
	((a)に占める割合)→	33.1% (33.1%)	11.5% (11.1%)	22.8% (20.8%)	34.3% (31.9%)

注)「英検準2級以上相当の英語力を有すると思われる生徒数」とは、英検準2級以上は取得していないが、相当の英語力を有していると英語担当教員が判断する生徒の人数を指す。

児童生徒の英語に対する意識

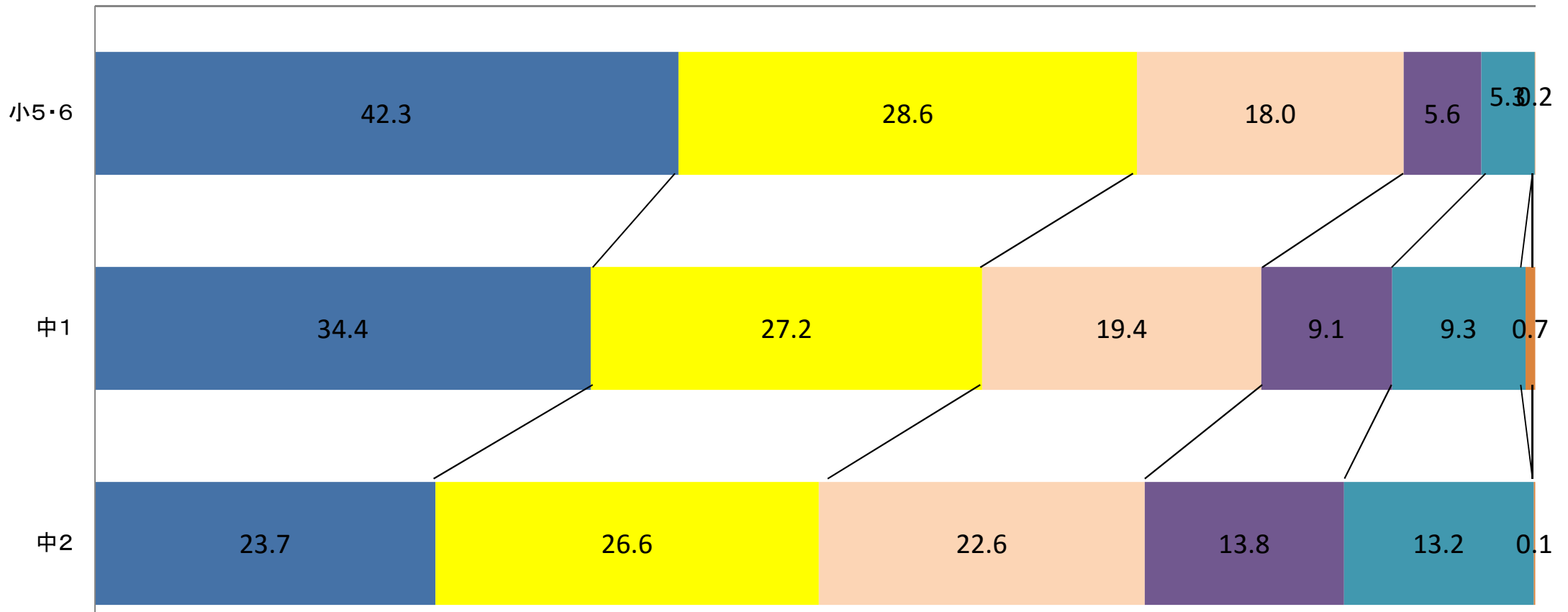
英語に対する意識

○ 小学校5,6年生の70.9%、中学1年生の61.6%、中学2年生の50.3%が「英語が好き」と回答。

Q. あなたは、英語が好きですか。(単一回答)

■好き ■どちらかといえば好き ■どちらともいえない ■どちらかといえば嫌い ■嫌い ■無回答

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%



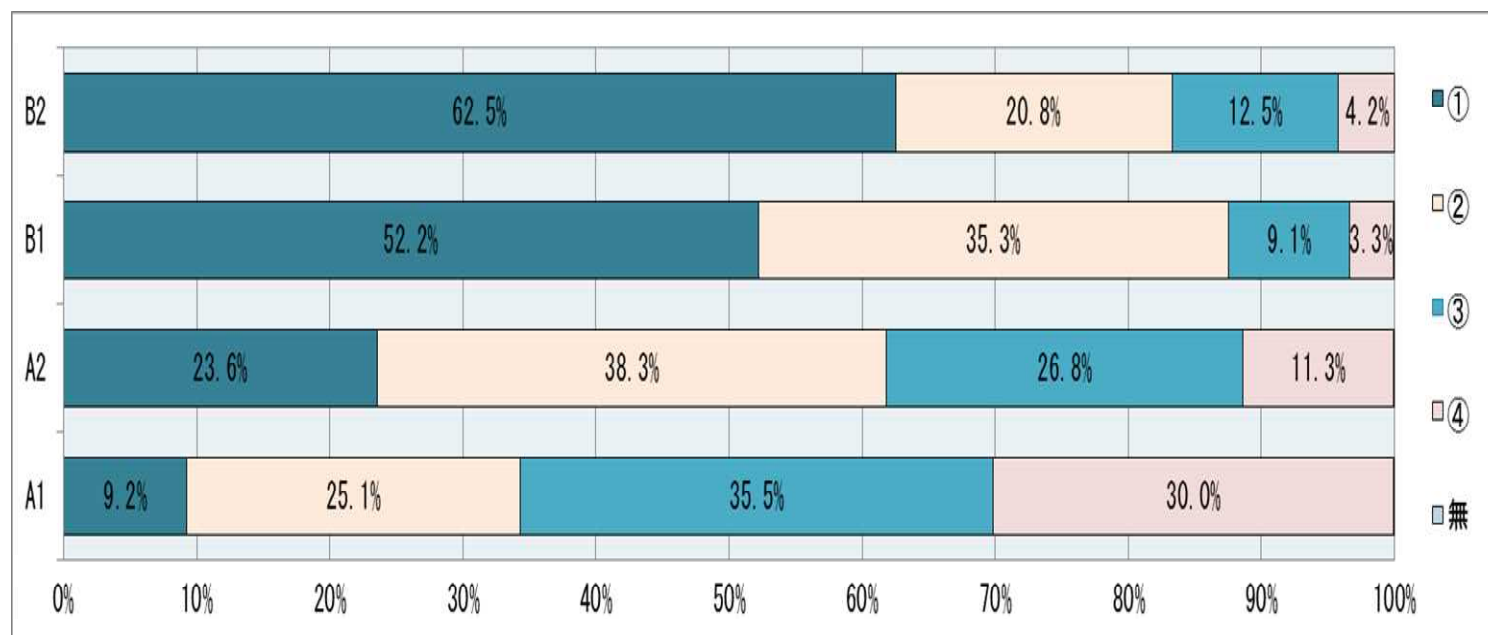
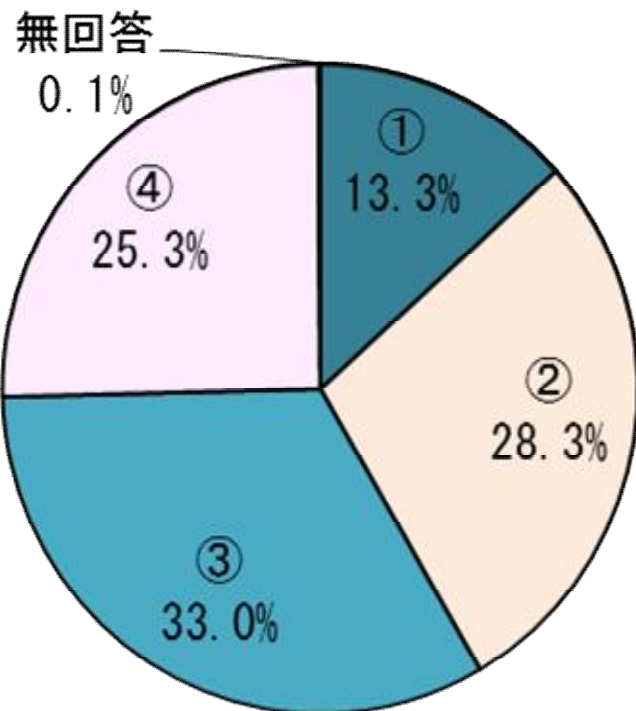
参考：英語学習に対する高校3年生の意識

生徒の英語学習に対する意識①

○英語が好きではない（選択肢③④）との回答が半数を上回る。特にA1レベルにおいて顕著（公立）。

問 英語の学習は好きですか。最も当てはまる**選択肢**を1つ選んでください。

① そう思う ② どちらかといえば、そう思う ③ どちらかといえば、そう思わない ④ そう思わない



※ 「読むこと」のテスト結果とのクロス

小学校外国語活動(5, 6年生)の成果・効果について

平成23年度より、小学校高学年(5, 6年生)に外国語活動(週1コマ)を導入後、

○児童生徒:小学生の72.3%(71.7%)が「英語の授業が好き」、91.5%(91.5%)が「英語が使えるようになりたい」、中学1年生の8割以上が、小学校の外国語活動で行った「アルファベットを読むこと」や「英語で簡単な会話をする」が「中学校で役立っている」と回答。

○小学校教員:導入前と比べ、高学年児童に「成果や変容がみられた」と感じる教員が76.6%(76.5%)

○中学校教員:導入前と比べ、中1の生徒に「成果や変容がみられた」と感じる教員が65.3%(77.8%)

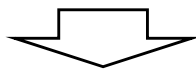
その変容として、外国語によるコミュニケーションへの積極的な関心・意欲・態度のみならず、英語を聞いたり話したりする力もついてきていると挙げている。

(出典:平成26年度小学校外国語活動実施状況調査)

※上記()内の数値は、H23,24実施の調査結果

【現状】

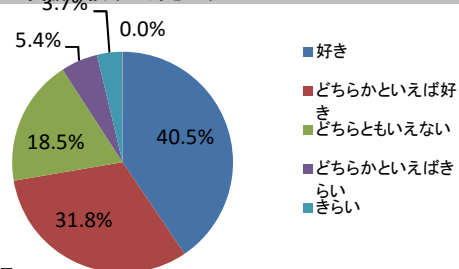
目標:外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。



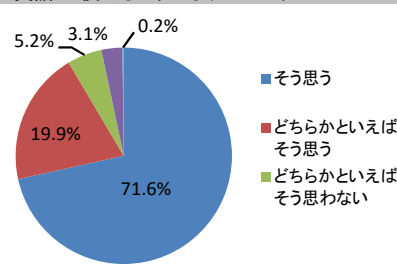
【成果】

○外国語活動に肯定的な児童が多い。

Q 英語の授業は好きですか



Q 英語が 使えるようになりたいですか



出典:小学校外国語活動実施状況調査(H24年)

【課題】

○中学1年生の約8割が、小学校で「英単語・文を読む」「英単語・文を書く」ことをもってしておきかかったと回答。

○①ALT等と打合せや教材研究をする時間の確保、②外国語活動の指導力、指導力向上のための研修機会が不十分であると感じている。

◆中学1年生は、小学校外国語活動の授業で学んだことが中学校の英語の授業で役だったと考えている。特に「話す」「聞く」ことで役立ったと回答。

	構成比
英語で簡単な会話をする	82.8%(80.5%)
英語の発音を練習すること	75.8%(73.7%)
友だちや先生などが英語で話しているのを聞くこと	73.2%(71.7%)
英語で自分のことや意見を言うこと	55.5%(53.9%)
英単語を読むこと	72.9%(68.4%)
英語の文を読むこと	60.8%(60.3%)

出典:平成26年度小学校外国語活動実施状況調査(H26年)
※()内の数値は、H24実施の調査結果

◇東京都における小学校外国語活動の成果

東京都中学校英語教育研究会より

- 小学校外国語活動の影響で臆することなく、コミュニケーションができる生徒が増加
- 小学校外国語活動の効果で、音声に慣れている。
- 低・中学年で週2時間外国語活動を行っている地区では中学に入った段階で文字が読める・書ける。

(参考)主な課題

- 中学校入学以前に、「英語は苦手」と感じる生徒がいる。

東京都A区より

- 小学校外国語活動の影響で臆することなく、コミュニケーションができる生徒が増加
- コミュニケーションへの関心・意欲・態度の高まり
- 小学校外国語活動の効果で、音声に慣れている。

小学校外国語活動(5, 6年生)の成果・効果について (中学1年生対象調査結果より)

出典: 小学校外国語活動実施状況調査(H26) 小学校5, 6年児童約2万人、中学校1・2学生徒約2万人、小学校管理職・学級担任、中学校管理職・外国語科担当教員それぞれ約3千人を対象に調査

小学校外国語活動が中学校でどのように役立ったか (中1)

- 「小学校の外国語活動で学んだことの中で、中学校の英語の授業で役に立ったこと」として、
生徒の88.8%が「アルファベットを読むこと」(86.8%)、
83.9%が「アルファベットを書くこと」(80.7%)、
82.8%が「英語で簡単な会話をする事」(80.5%)、
75.8%が「英語の発音を練習すること」(73.7%)、
と回答。

()内は、24年度調査結果

小学校の外国語活動でもっと学習しておきたかったこと (中1)

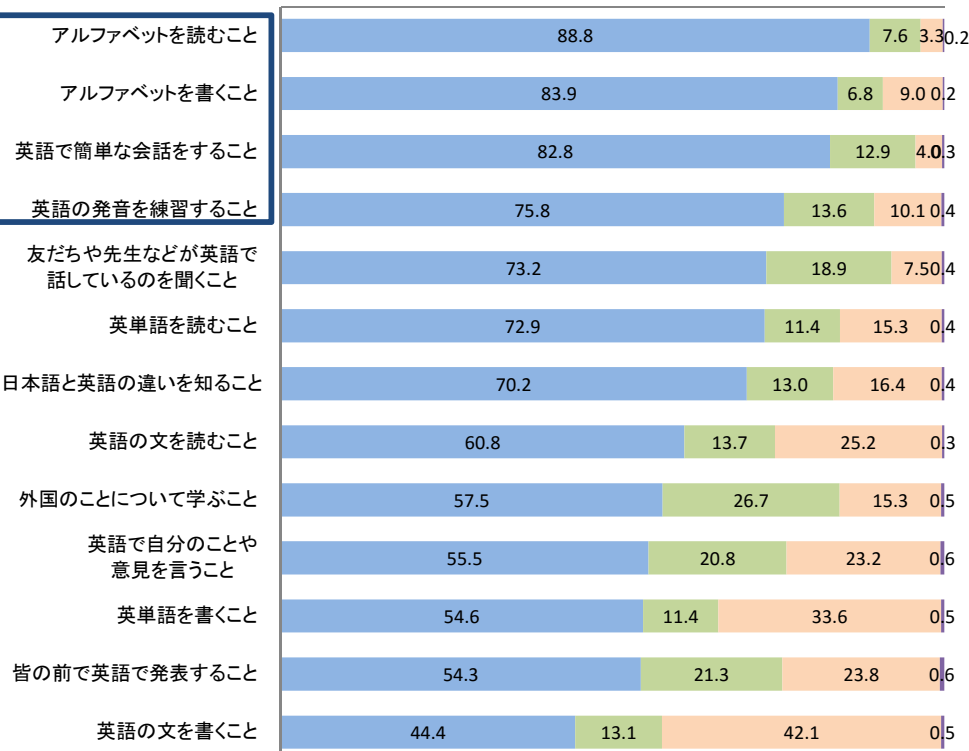
- 「小学校の外国語活動でもっと学習しておきたかったこと」として、
生徒の83.7%が「英単語を書くこと」(81.7%)、
80.9%が「英語の文を書くこと」(78.6%)、
80.1%が「英単語を読むこと」(77.9%)、
79.8%が「英語の文を読むこと」(77.6%)、
と回答。

()内は、24年度調査結果

Q. 小学校の英語の授業で学んだことの中で、中学校の英語の授業で役に立ったことはありますか。(単数回答)

■役に立った ■役に立たなかった ■小学校でやっていないと思う ■無回答

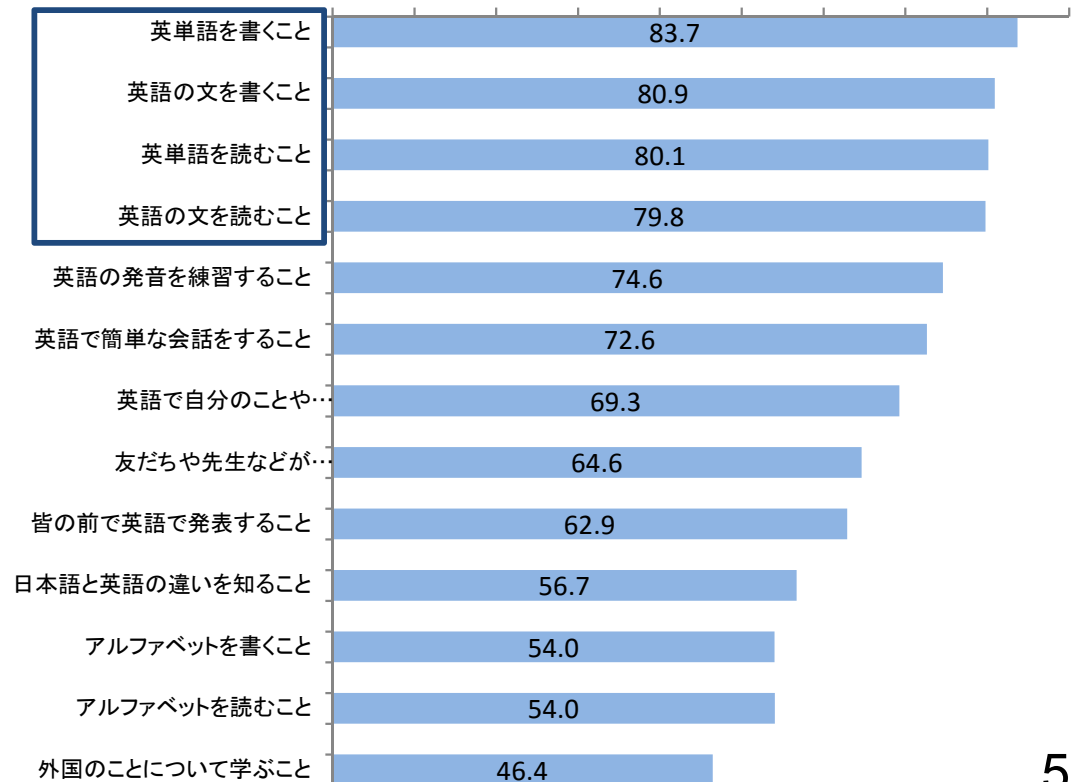
0% 20% 40% 60% 80% 100%



Q. 以下の項目は、小学校の外国語活動でもっと学習しておきたかったと思いますか。

※「そう思う」「そう思わない」「無回答」のうち、「そう思う」と回答した割合

0 10 20 30 40 50 60 70 80 90



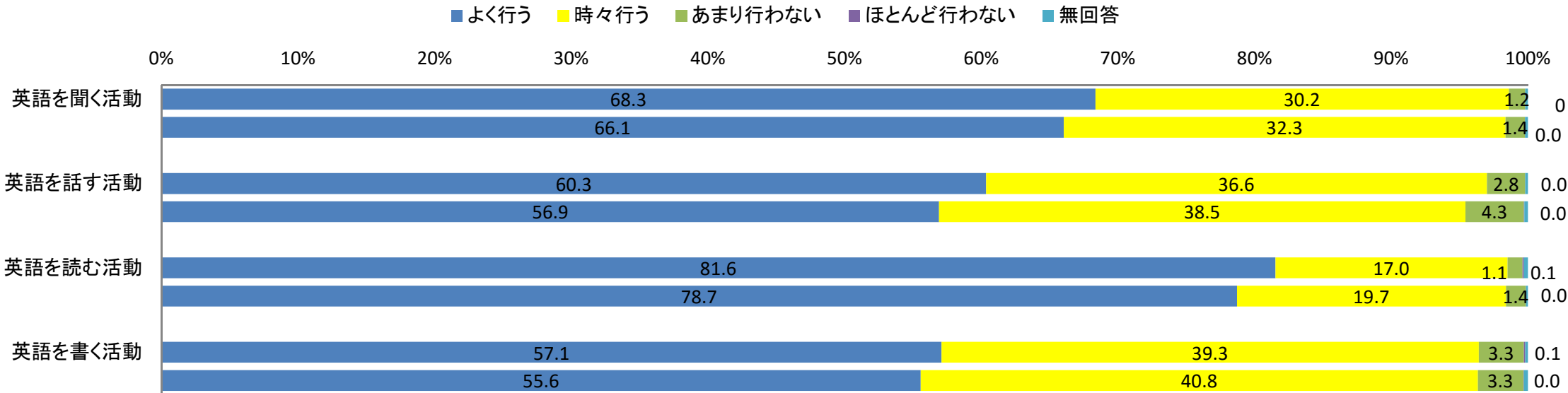
中学校外国語科担当教員の外国語科指導状況

授業における言語活動の指導①

- 「聞く活動」66.1%（68.3%）、「読む」78.7%（81.6%）に比べ、「書く活動」55.6%（57.1%）、「話す活動」56.9%（60.3%）の割合がやや低くなっている。

（ ）内は、前回調査結果

Q. あなたの英語の授業において、1つの単元の中でそれぞれの活動をどの程度行っていますか。（単数回答）

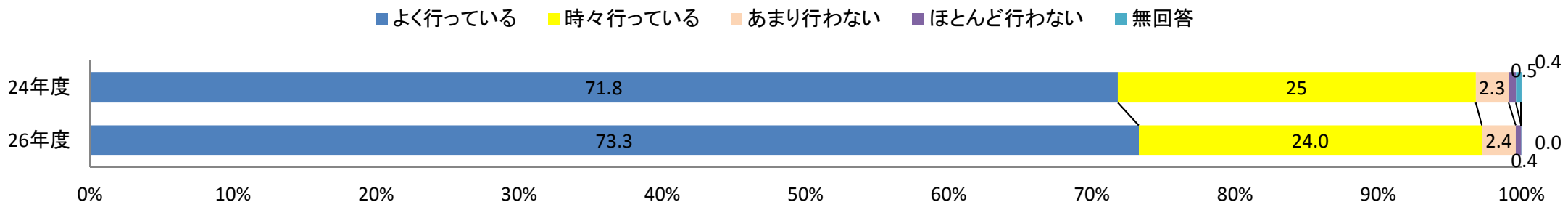


上段：H24年度調査 下段：H26年度調査

ペアワーク・グループワークの実施状況

- 97.3%（96.8%）の教員がペアワークやグループワーク「よく行っている、時々行っている」と回答。

Q. あなたの英語の授業において、生徒にペアワークやグループワークをどの程度させていますか。（単数回答）

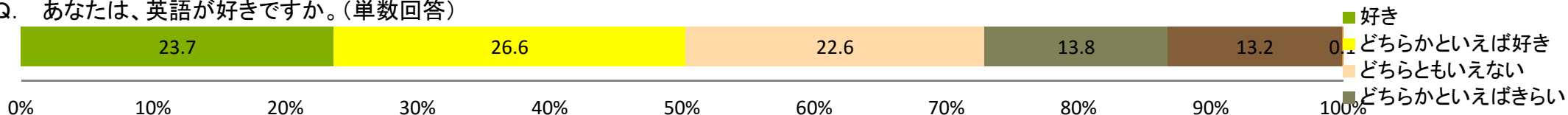


中学校2年生の外国語科に対する意識

英語に対する意識（中2）

○ 生徒の50.3%が「英語が好き、どちらかといえば好き」と回答。

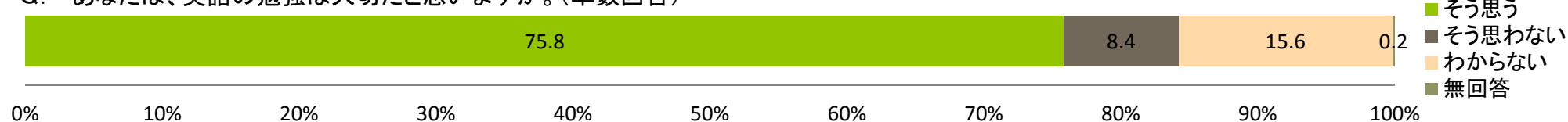
Q. あなたは、英語が好きですか。（単数回答）



英語の勉強に対する意識（中2）

○ 生徒の75.8%が「英語の勉強は大切だと思う」と回答。

Q. あなたは、英語の勉強は大切だと思いますか。（単数回答）

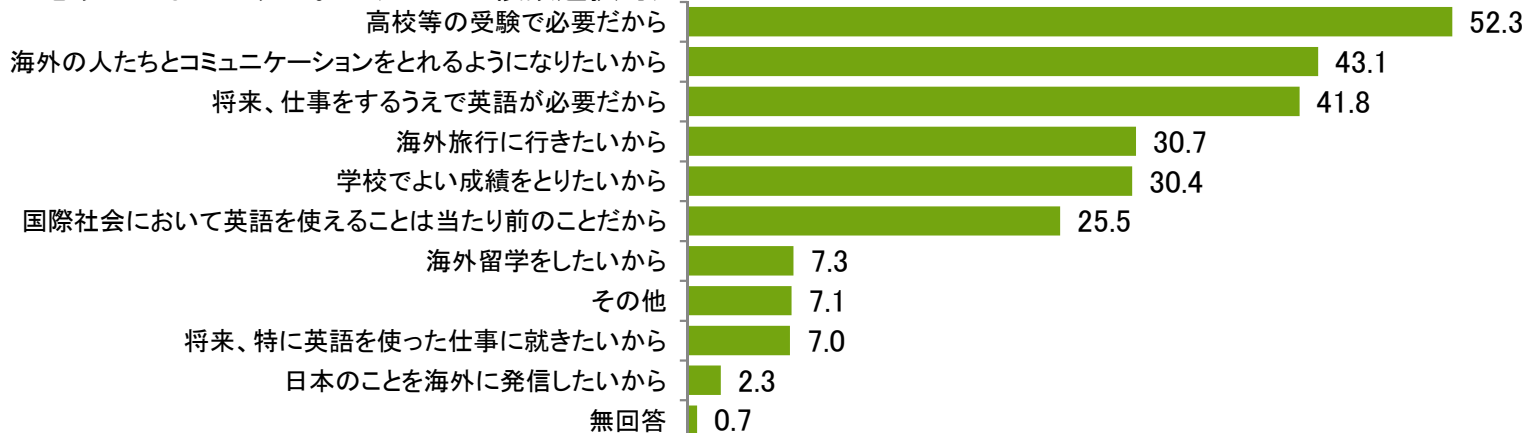


将来の英語使用に対する意識①（中2）

○ 英語の勉強が大切だと思う理由として、生徒の

- ・ 52.3%が「高校等の受験で必要だから」
- ・ 43.1%が「海外の人たちとコミュニケーションをとれるようになりたいから」
- ・ 41.8%が「将来、仕事をするうえで英語が必要だから」と回答。

Q. 英語の勉強が大切だと思うのはなぜですか。（3つまで複数選択可）

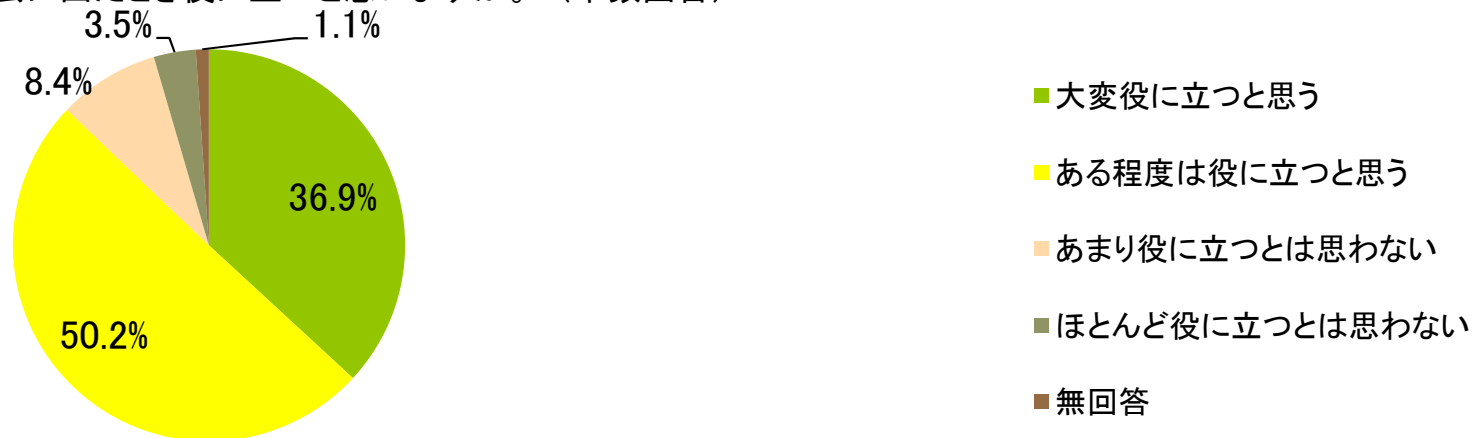


中学校2年生の外国語科に対する意識

将来の英語使用に対する意識② (中2)

○ 生徒の87.1%が、授業で学習したことは将来社会に出たときに「大変役に立つと思う、ある程度は役に立つと思う」と回答。

Q. 授業で学習したことは、将来社会に出たとき役に立つと思いますか。(単数回答)



将来の英語使用に対する意識③ (中2)

- 生徒の42.0%が将来英語を使って「ぜひ働いてみたい、機会があれば働いてみたいと思う」と回答。
- 一方、「あまり働いてみたいとは思わない、全く働いてみたいとは思わない」と回答した生徒の割合は57.1%。

Q. 将来、英語を使って海外で働いてみたいと思いますか。(単数回答)



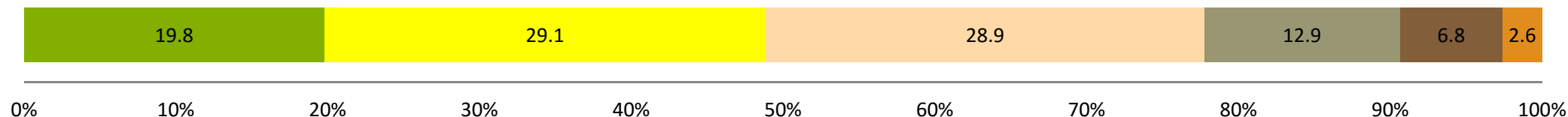
中学校2年生の外国語科に対する意識

授業の理解についての状況①（中2）

- 生徒の
 - ・48.9%が「英語の授業内容を理解している、どちらかといえば理解している」
 - ・28.9%が「半分くらい理解している」
 - ・19.7%が「授業内容を理解していない、どちらかといえば理解していない」と回答。

Q. 英語の授業の内容を理解していると思いますか。（単数回答）

■ 理解している ■ どちらかといえば理解している ■ 半分くらい理解している ■ どちらかといえば理解していない ■ 理解していない ■ 無回答

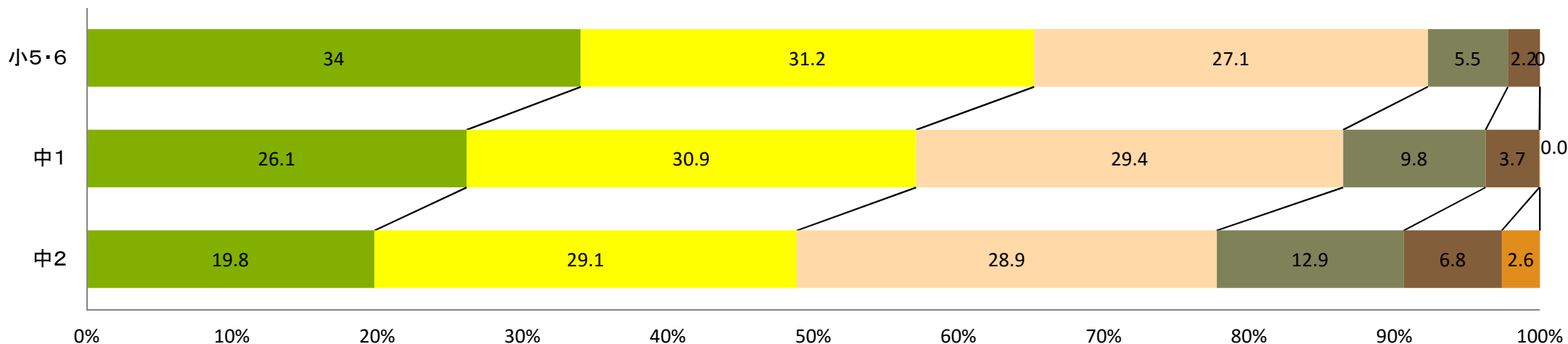


授業の理解についての状況②（小5・6、中1、中2）

- 「英語の授業を理解していると思うか」という問いに対し、小学生5, 6年生の65.2%、中学1年生の57.0%、中学2年生の48.9%が「理解している、どちらかといえば理解している」と回答。

Q. 英語の授業の内容を理解していると思いますか。（再掲）

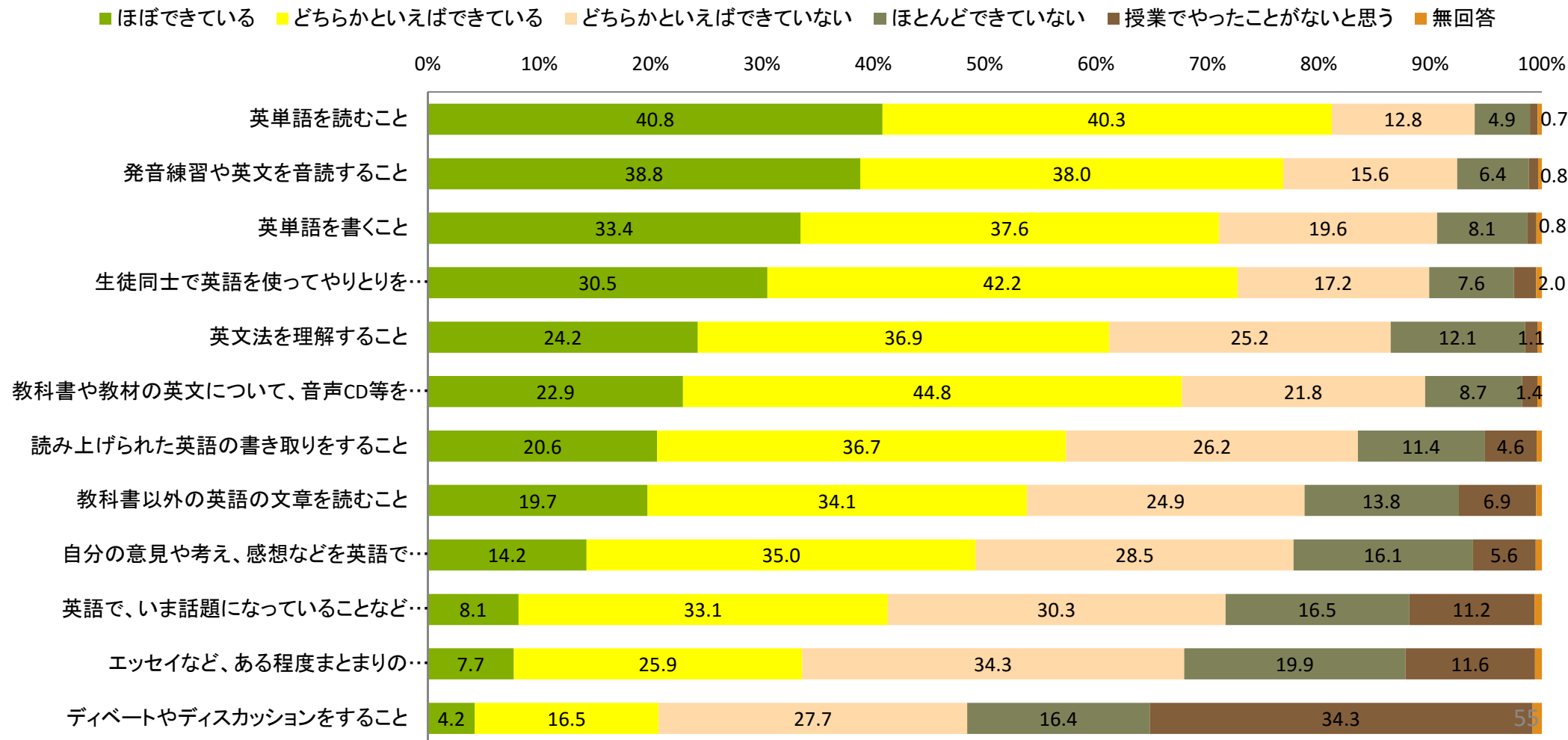
■ 理解している ■ どちらかといえば理解している ■ 半分くらい理解している ■ どちらかといえば理解していない ■ 理解していない ■ 無回答



英語の授業での取組状況（中2）

- 授業でどの程度できていると思うかについて、生徒の
 - ・ 81.1%が「英単語を読むことがほぼできている、どちらかといえばできている」
 - ・ 76.8%が「発音練習や英文を音読することがほぼできている、どちらかといえばできている」
 - ・ 33.6%が「エッセイなど、ある程度まとまりのある文章を書くことがほぼできている、どちらかといえばできている」
 - ・ 20.7%が「ディベートやディスカッションをすることがほぼできている、どちらかといえばできている」と回答。

Q. 英語の授業の中で、次の項目についてどの程度できていると思いますか。（単数回答）

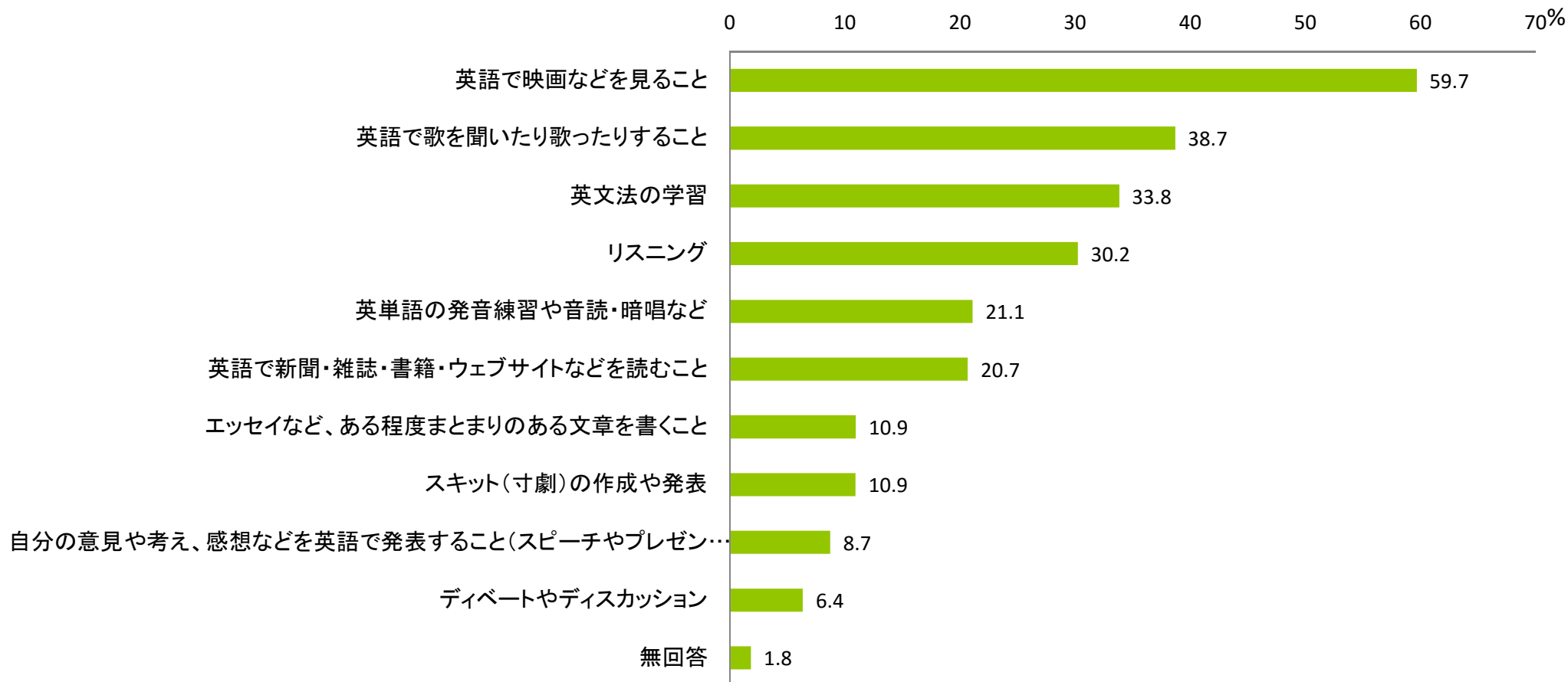


中学校2年生の外国語科に対する意識

英語の授業でもっとしてみたいこと（中2）

- 英語の授業の中で、生徒の
 - ・ 59.7%が「英語で映画などを見ること」
 - ・ 38.7%が「英語で歌を聴いたり歌ったりすること」
 - ・ 33.8%が「英文法の学習」
 - ・ 30.2%が「リスニング」をもっとしてみたいと回答。
- 生徒の8.7%が「自分の意見や考え、感想などを英語で発表すること（スピーチやプレゼンテーション）」と回答。6.4%が「ディベートやディスカッション」について、「もっとしてみたい」と回答。

Q. 英語の授業の中で、どのようなことをもっとしてみたいと思いますか。（3つまで複数回答可）



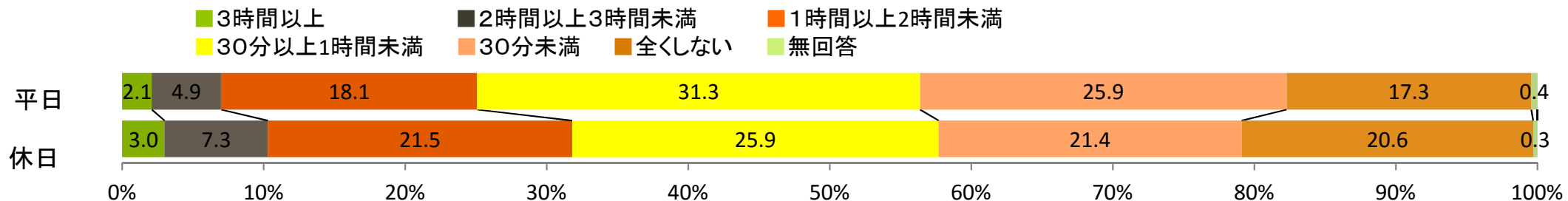
「平成26年度 小学校外国語活動実施状況調査結果」

中学校2年生の外国語科に対する意識

予習・復習の状況（中2）

○ 生徒が平日、1日あたり予習復習を行う時間の平均の割合は、「30分以上1時間未満」が31.3%と割合が高い。

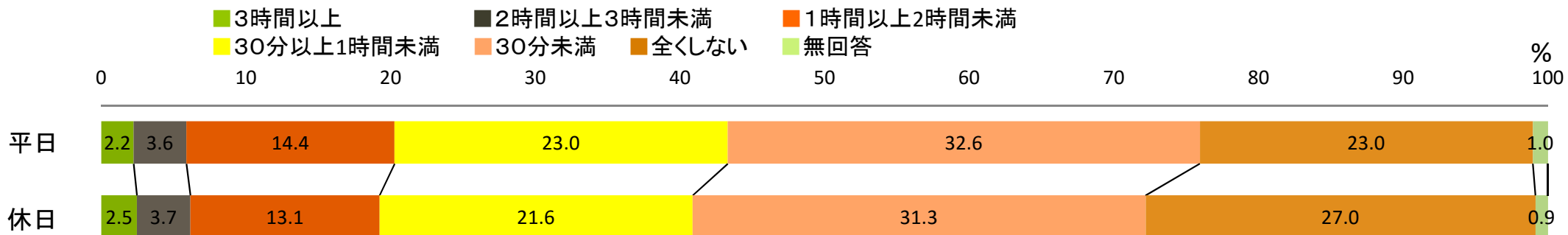
Q. 学校の授業の予習・復習を1日あたりどのくらい行っていますか。（単数回答）



英語に触れる状況（中2）

○ 学校の授業の予習・復習以外に英語に触れている生徒の割合は平日で75.8%、休日で72.2%。

Q. 学校の授業の予習・復習以外に1日あたりどのくらい英語に触れていますか。（単数回答）

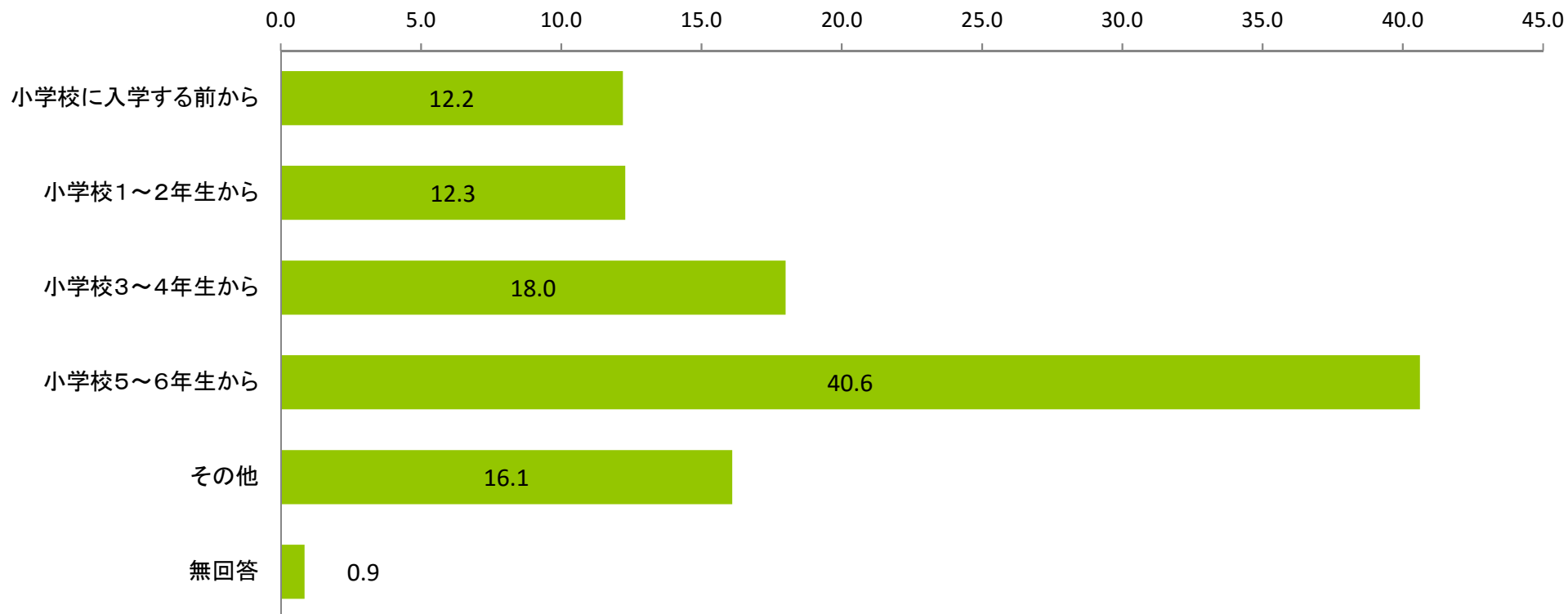


中学校2年生の英語に対する取組状況

英語を学び始めた時期（中2）

- 英語を学び始めた時期について、生徒の
 - ・ 12.2%が「小学校に入学する前から」
 - ・ 12.3%が「小学校1～2年生から」
 - ・ 18.0%が「小学校3～4年生から」
 - ・ 40.6%が「小学校5～6年生から」と回答。

Q. 英語を学び始めたのはいつですか。（単数回答）



(参考) 児童生徒の英語学習に関する状況

- 児童生徒が学校の授業や英会話教室で英語を学び始めた時期
(平成25年度 全国学力・学習状況調査 児童生徒質問紙調査)

学校種	小学校入学前	小1・小2	小3・小4	小5・小6	中1以降
小学校	17.9%	23.9%	25.0%	32.8%	—
中学校	11.2%	11.8%	18.6%	38.4%	19.8%

- 英語の学習が好きと回答している児童生徒
(平成25年度 全国学力・学習状況調査 児童生徒質問紙調査)

小学校第6学年	中学校第3学年
約76%	約53%

- 将来、外国へ留学したり国際的な仕事に就いたりしてみたいと思うと回答している児童生徒
(平成25年度 全国学力・学習状況調査 児童生徒質問紙調査)

小学校第6学年	中学校第3学年
約39%	約31%

外国語科担当教員の中学1年生に対する意識

外国語活動を経験した中学1年の生徒の変容②

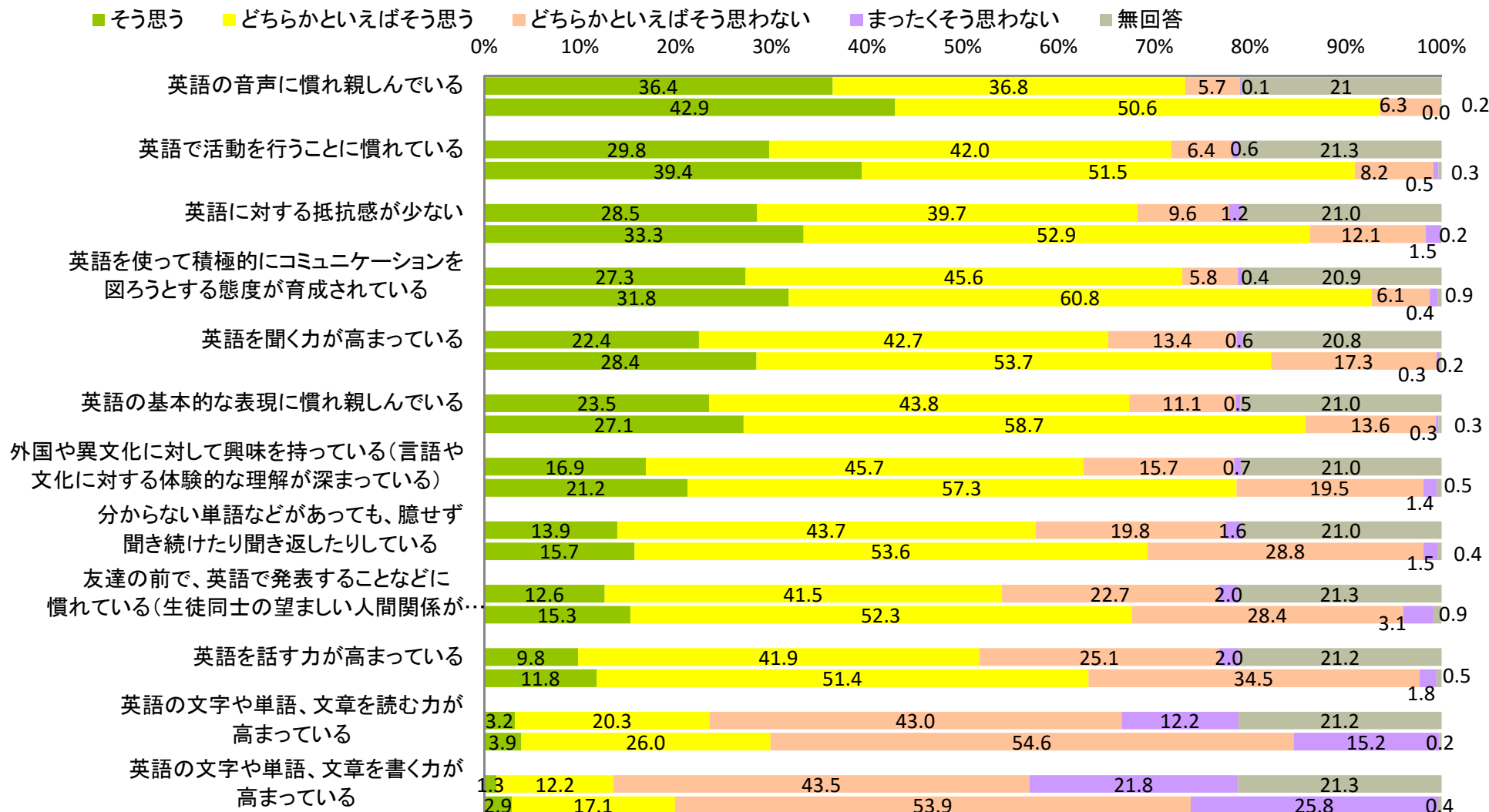
- 小学校で外国語活動を経験したことにより、「英語の音声に慣れ親しんでいる」93.5% (73.2%)、「英語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が育成されている」92.6% (72.9%) などの成果や変容が見られる。

※上記の%数値は「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合計

()内は、前回調査結果

Q. 具体的にどのような成果や変容がみられましたか。(単数回答)

上段:H24年度調査 下段:H26年度調査



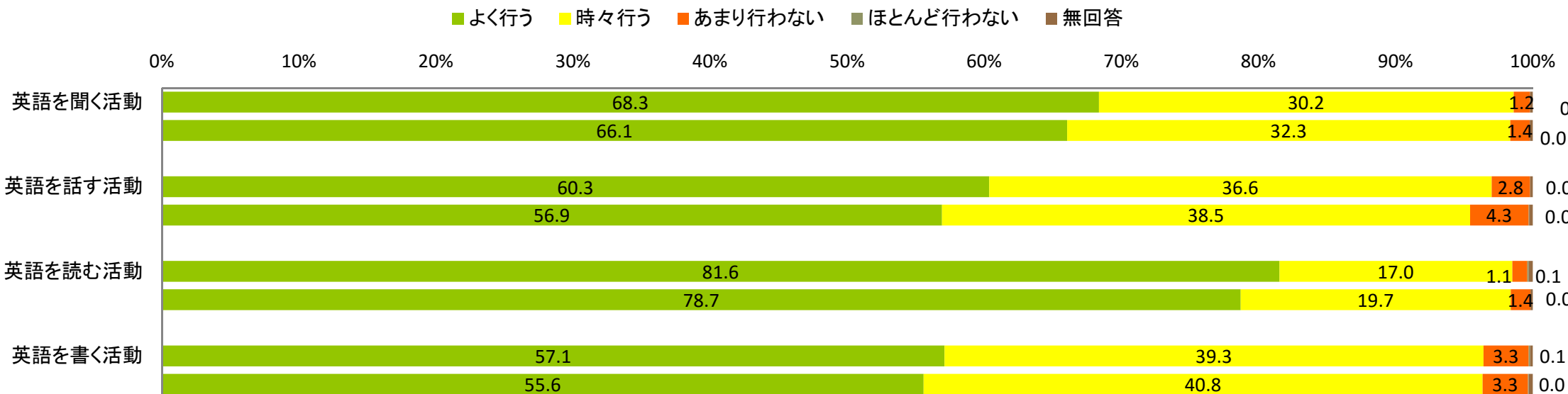
中学校外国語科担当教員の外国語科指導状況

授業における言語活動の指導①

○ 「聞く活動」66.1%（68.3%）、「読む」78.7%（81.6%）に比べ、「書く活動」55.6%（57.1%）、「話す活動」56.9%（60.3%）の割合がやや低くなっている。

（ ）内は、前回調査結果

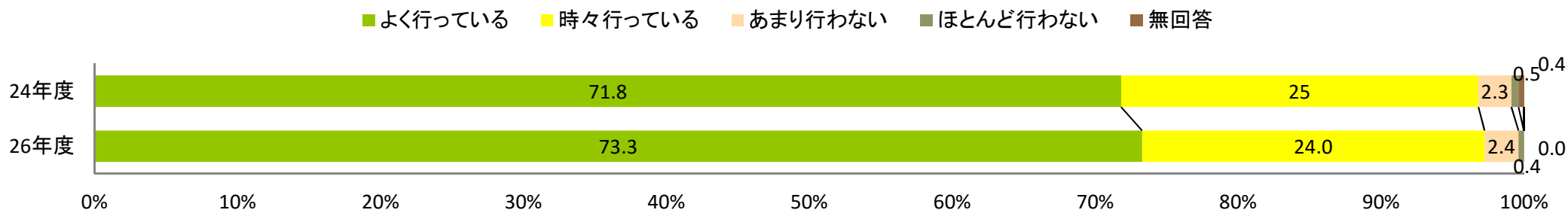
Q. あなたの英語の授業において、1つの単元の中でそれぞれの活動をどの程度行っていますか。（単数回答）



ペアワーク・グループワークの実施状況

○ 97.3%（96.8%）の教員がペアワークやグループワーク「よく行っている、時々行っている」と回答。

Q. あなたの英語の授業において、生徒にペアワークやグループワークをどの程度させていますか。（単数回答）



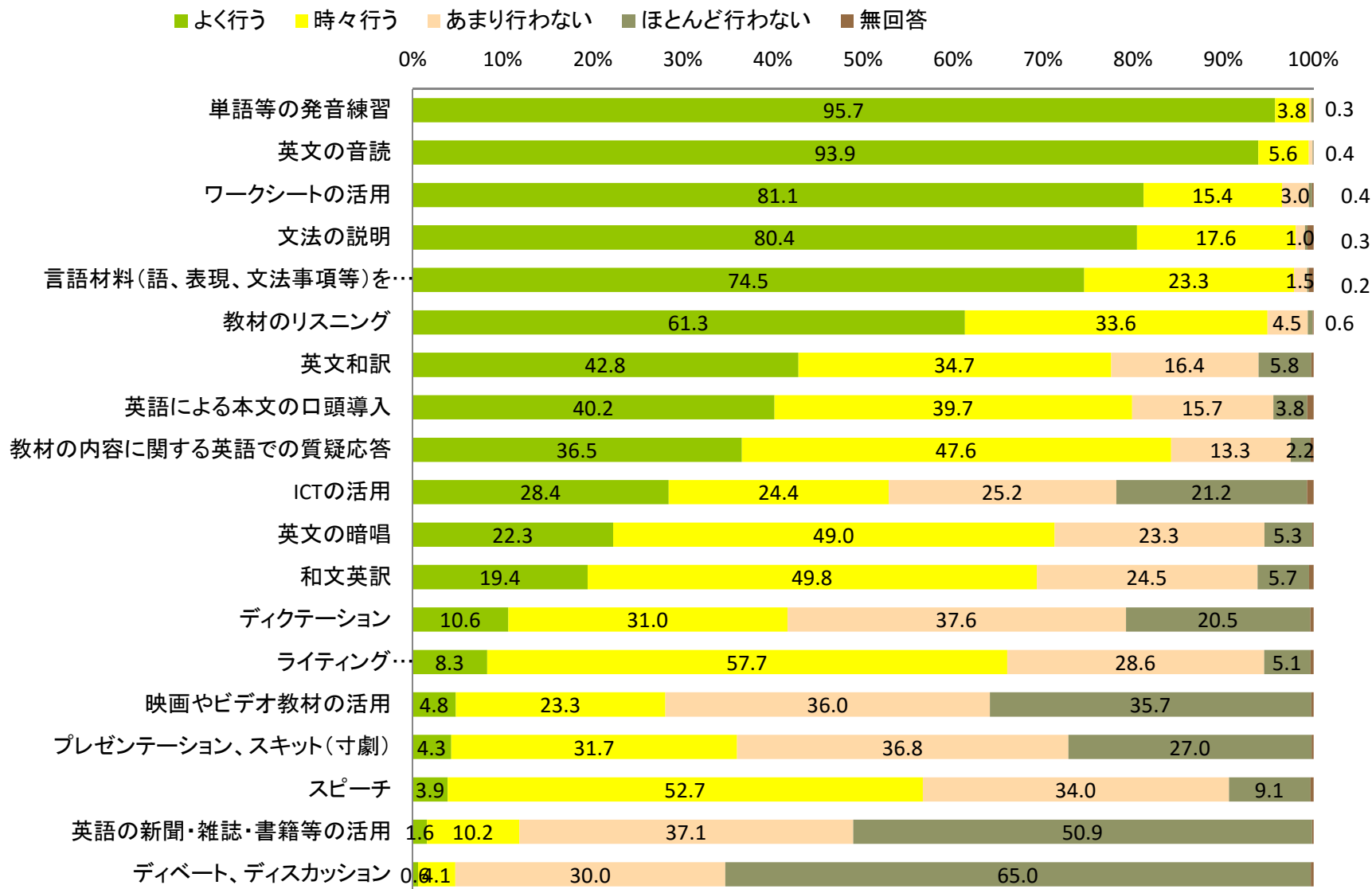
中学校外国語科担当教員の外国語科指導状況

授業における言語活動の指導②

- 「文法の説明」98%や「言語材料を活用できるようにするための練習」97.8%に比べ、それをさらに活用して行う「スピーチ」56.6%、「プレゼンテーションやスキット（寸劇）」36.0%、「ディベート、ディスカッション」34.7%の割合は低い。

※上記の%数値は「よく行う」「時々行う」の合計

Q. あなたの英語の授業において、次のようなことをどのくらい行いますか。（単数回答）

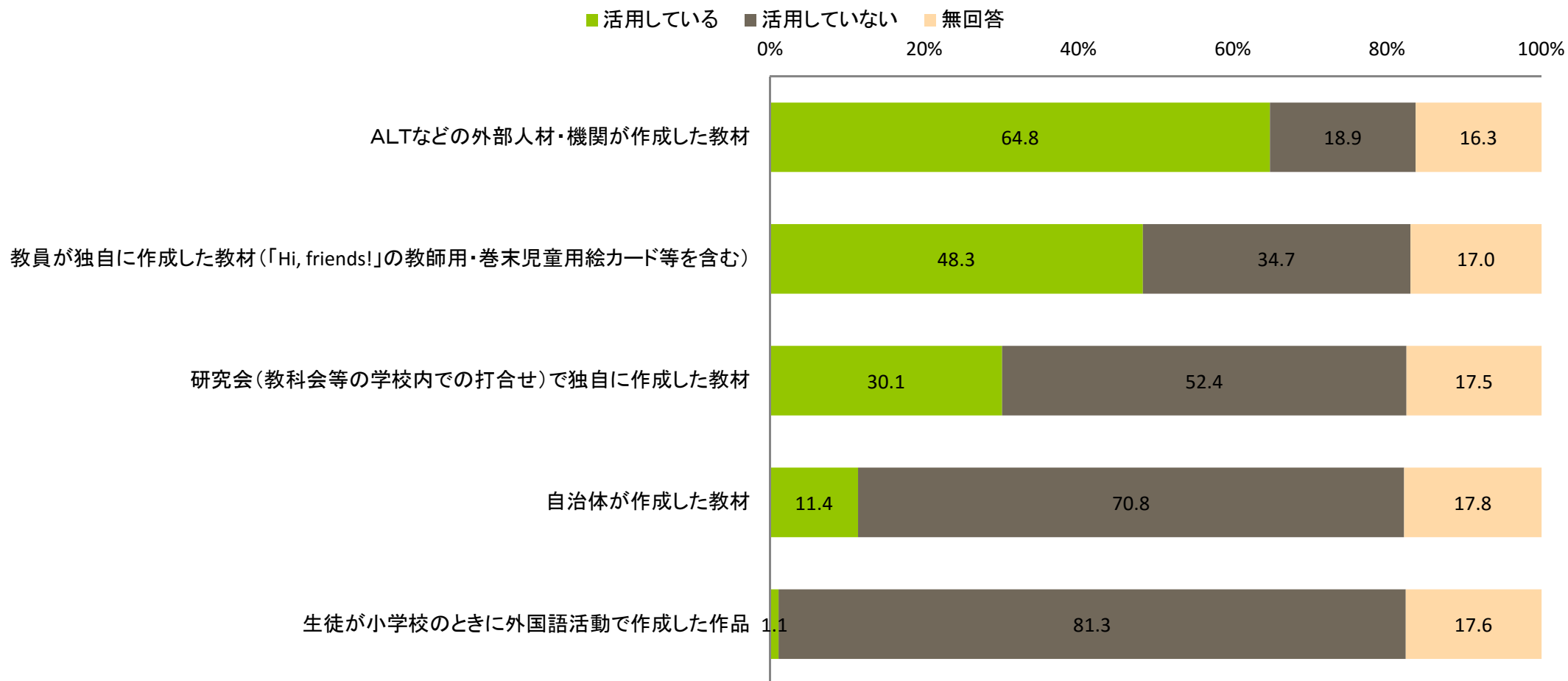


中学校外国語科担当教員の外国語科指導状況

活用している教材の状況

- 英語の授業で活用している教材について、教員の
 - ・ 64.8%が「ALTなどの外部人材・機関が作成した教材」
 - ・ 48.3%が「教員が独自に作成した教材（「Hi, friends!」の教師用・巻末児童用絵カード等を含む）」
 - ・ 30.1%が「研究会（教科会等の学校内での打合せ）で独自に作成した教材」を活用していると回答。

Q. 外国語活動を踏まえ、あなたが英語の授業で活用している教材について、それぞれあてはまるものを選択してください。（単数回答）

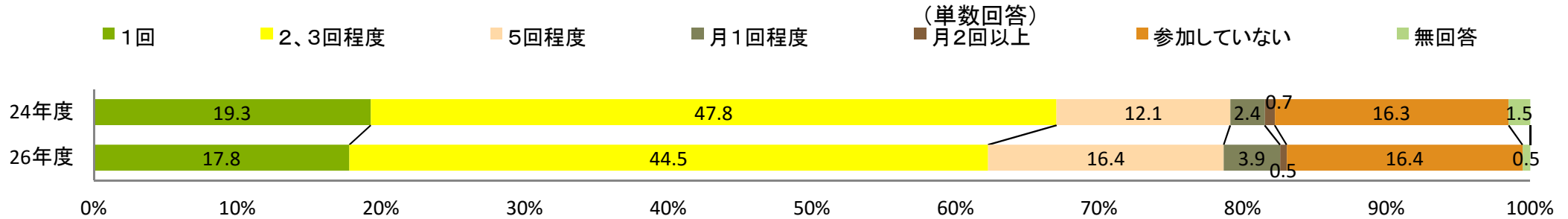


外国語科担当教員の研修等に対する意識

学校外での研修

- 教員の83.1% (82.3%) が学校外での研修に参加している。
 - 参加回数について、44.5% (47.8%) は年度内に2、3回程度と回答。
- ()内は、前回調査結果

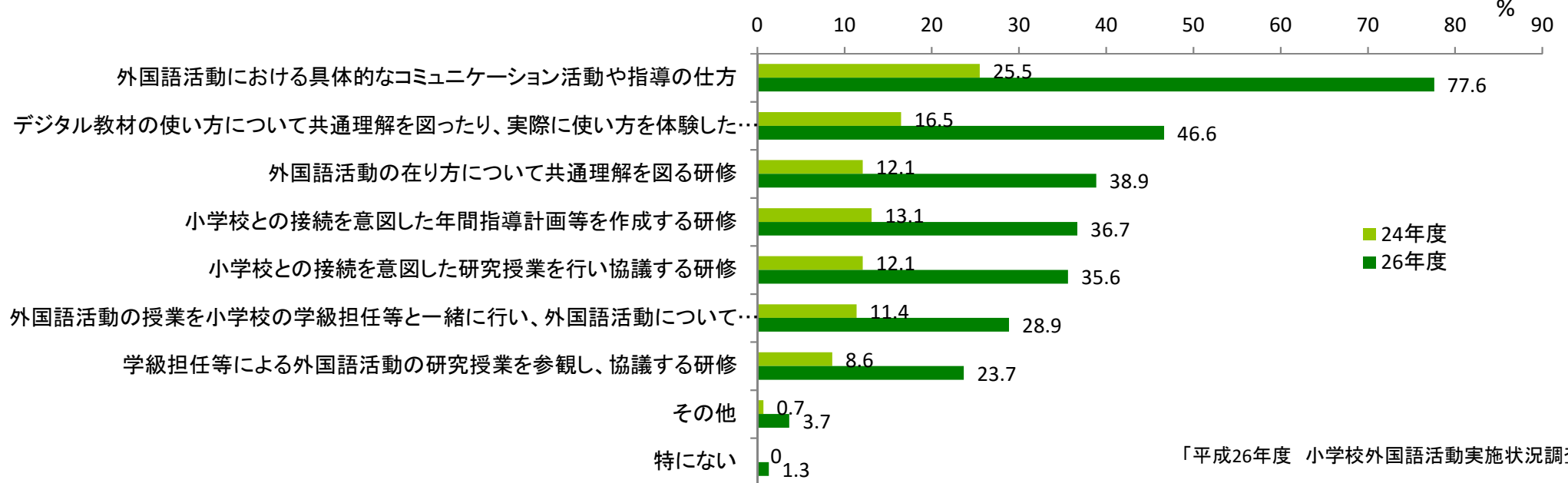
Q. あなたは今年度中にどの程度外国語活動を踏まえた指導に関する学校外での研修に参加しましたか。



必要だと感じる研修

- 教員の77.6% (25.5%) が「外国語活動における具体的なコミュニケーション活動や指導の仕方に関する研修」が必要と回答。
- ()内は、前回調査結果

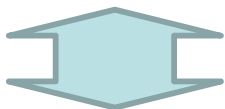
Q. あなたが必要だと感じる研修について、あてはまるものをすべて選んで下さい。(複数回答可)



秋の事業レビューにおける指摘について(英語教育)

レビューでの指摘

中・高校生の学力到達度合、教員の英語力は非常に低い。教員研修を漫然と実施するだけでなく、中高の教員の配置見直しやICT等の外部教材の活用など、費用対効果を考えつつ検証すべき。



文部科学省としての対応

- 「第2期教育振興基本計画」(H25年6月閣議決定:H25~29年度)の目標設定の下、文部科学省「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を公表(H25年12月)
⇒ 平成26年度より事業開始、PDCAサイクルの徹底



- 「生徒の英語力向上推進プラン」(H26. 6公表)

- ・ 中学3年生を対象とした英語4技能を測定する「全国的な学力調査」実施(平成31年度を目途)に向けた検討を今年8月より開始

- ・ 各都道府県で「英語教育改善プラン」の策定・実行によるPDCAサイクル構築

- ①平成27年秋:各都道府県の「英語教育改善プラン」の策定を要請(目標設定、管理と研修計画、検証など)
- ②平成28年春:各都道府県の「英語教育改善プラン」の公表
- ③平成28年度中:各都道府県のプランとその効果のモニタリング・国の目標達成状況のモニタリング
- ④平成29年度中:レビューし、第3期教育振興基本計画の新たな目標設定



文部科学省(小・中・高等学校を通じた英語教育強化事業等)(H26より順次実施)

- ①英語教育強化地域拠点事業(29地域)
- ②小学校英語教科化に向けた新たな補助教材開発・検証
- ③外部専門機関と連携した英語担当教員の指導力向上(「英語教育推進リーダー」養成)
- ④外部試験団体と連携した生徒の4技能英語力調査(中3・高3を対象に実施)

第2期教育振興基本計画(H25~29年度)の成果目標

[生徒の英語力]

※中学卒業段階では英検3級程度以上50%
(H26:35%)、

高校卒業段階では英検準2級~2級程度以上50%(H26:32%)

[教員の英語力]

※英語教員は英検準1級、TOEFLiBT80点程度以上(中学英語教員は50%(H26:29%)、高校英語教員は75%以上(H26:55%))

- ⑤教員養成の抜本改善
- ⑥小学校英語教科化に対応した
中学英語免許状取得支援(H28年度新規要求)
- ⑦教員の採用改善
- ⑧ICT活用による英語教育の推進

目標達成のための具体的なPDCAサイクル

国の支援(26年度以降、開始)

①『英語教育強化地域拠点事業』

(研究開発課題例)

- ・小・中・高を通じた指標形式の目標設定
- ・小学校英語の早期化・教科化

②『外部専門機関と連携した英語指導力向上事業』

- ・生徒の英語力、英語担当教員の英語力・指導力の把握・検証・公表・改善
- ・改善例を公表

①平成27年秋：各県の「英語教育改善プラン」の策定要請の徹底
同プラン内の教員の英語力・指導力向上の具体的計画策定について強く要請

②平成28年春：各県の「改善プラン」の公表

③平成28年度中：各県のプランとその効果のモニタリング
国の目標達成状況のモニタリング

④平成29年度中：レビューし、第3期教育振興基本計画の新たな目標設定

県における「英語教育改善プラン」策定・公表

課題

[生徒] 4技能、特に「話す」「書く」発信力が弱い
[教員] 生徒が自分の考えや気持ちなどを英語で伝え合う指導に必要な英語力・指導力が十分でない。

検証



改善



県教育委員会の目標設定・管理(高校の例)

	H25年	H26年		～	H29年
	現状	目標値	達成値	⇒	目標値
学習到達目標の設定(CAN-DOリスト)	41%	100%	100%	～	100%
教員の授業における英語使用状況	55%	58%	60%	～	80%
教員の英語力	65%	72%	76%	～	95%
生徒の英語力	36%	40%	39.3%	～	50%

平成26年度は、研修受講後、民間の外部試験を受検し、英語力を10%以上向上した事例もあり

「課題」を踏まえ、次期学習指導要領の準備と課題に係る取組に重点化。

(例)

◆ 英語教師の英語力向上講座

- ・受講後、全員が英検、TOEFL、TOEICなど民間の資格・検定試験を受検

◆ 英語によるスピーチ・ディベート指導者養成講座

- ・指導法、パフォーマンス評価方法、ディベートを通して身につく力(論理的思考力などの育成)、ディベート大会による活動

◆ 外国語指導助手(ALT)の指導力向上研修

(参考) 外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ共通参照枠について

- CEFR (Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment) は、語学シラバスやカリキュラムの手引きの作成、学習指導教材の編集、外国語運用能力の評価のために、透明性が高く、分かりやすい、包括的な基盤を提供するものとして、20年以上にわたる研究を経て策定された。欧州域内外で使われている。
- 欧州域内では、国により、CEFRの「共通参照レベル」が、初等教育、中等教育を通じた目標として適用されたり、欧州域内の言語能力に関する調査を実施するにあたって用いられたりするなどしている。

熟練した 言語使用者	C2	聞いたり読んだりした、ほぼ全てのものを容易に理解することができる。いろいろな話し言葉や書き言葉から得た情報をまとめ、根拠も論点も一貫した方法で再構築できる。自然に、流暢かつ正確に自己表現ができる。
	C1	いろいろな種類の高度な内容のかなり長い文章を理解して、含意を把握できる。言葉を探しているという印象を与えずに、流暢に、また自然に自己表現ができる。社会生活を営むため、また学問上や職業上の目的で、言葉を柔軟かつ効果的に用いることができる。複雑な話題について明確で、しっかりとした構成の、詳細な文章を作ることができる。
自立した 言語使用者	B2	自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的な話題でも具体的な話題でも、複雑な文章の主要な内容を理解できる。母語話者とはお互いに緊張しないで普通にやり取りができるくらい流暢かつ自然である。幅広い話題について、明確で詳細な文章を作ることができる。
	B1	仕事、学校、娯楽などで普段出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば、主要な点を理解できる。その言葉が話されている地域にいるときに起こりそうな、たいていの事態に対処することができる。身近な話題や個人的に関心のある話題について、筋の通った簡単な文章を作ることができる。
基礎段階の言 語使用者	A2	ごく基本的な個人情報や家族情報、買い物、地元の地理、仕事など、直接的関係がある領域に関しては、文やよく使われる表現が理解できる。簡単で日常的な範囲なら、身近で日常の事柄について、単純で直接的な情報交換に応じることができる。
	A1	具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることができる。自分や他人を紹介することができ、住んでいるところや、誰と知り合いであるか、持ち物などの個人的情報について、質問をしたり、答えたりすることができる。もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助けが得られるならば、簡単なやり取りをすることができる。

各試験団体のデータによるCEFRとの対照表

CEFR	Cambridge English	英検	GTEC CBT	GTEC for STUDENTS	IELTS	TEAP	TEAP CBT	TOEFL iBT	TOEFL Junior Comprehensive	TOEIC / TOEIC S&W
C2	CPE (200+)				8.5-9.0					
C1	CAE (180-199)	1級 (2630-3400)	1400		7.0-8.0	400	800	95-120		1305-1390 L&R 945~ S&W 360~
B2	FCE (160-179)	準1級 (2304-3000)	1250-1399	980 L&R&W 810	5.5-6.5	334-399	600-795	72-94	341-352	1095-1300 L&R 785~ S&W 310~
B1	PET (140-159)	2級 (1980-2600)	1000-1249	815-979 L&R&W 675-809	4.0-5.0	226-333	420-595	42-71	322-340	790-1090 L&R 550~ S&W 240~
A2	KET (120-139)	準2級 (1284-1800)	700-999	565-814 L&R&W 485-674	3.0	150-225	235-415		300-321	385-785 L&R 225~ S&W 160~
A1		3級-5級 (419-1650)	-699	-564 L&R&W -484	2.0					200-380 L&R 120~ S&W 80~

英検：日本英語検定協会 <http://www.eiken.or.jp/forteachers/data/cefr/>
http://www.eiken.or.jp/association/association/info/2015/pdf/20151218_pressrelease_CSE2.pdf

TOEFL：米国ETS <http://www.ets.org/Media/Research/pdf/RM-15-06.pdf?WT.ac=clk>

IELTS：ブリティッシュ・カウンシル（および日本英語検定協会）資料より

TEAP：第1回 英語力の評価及び入試における外部試験活用に関する検討会 吉田研作教授資料より

Cambridge English（ケンブリッジ英検）：ケンブリッジ大学英語検定機構 <http://www.cambridgeenglish.org/exams-and-qualifications/cefr/cefr-exams/>
<http://www.cambridgeenglish.org/exams/cambridge-english-scale/>

GTEC：ベネッセコーポレーションによる資料より
「L&R&W」の記載が無い数値が4技能の合計点

TOEIC：IIBC <http://www.toEIC.or.jp/toEIC/about/result.html>
「L&R」または「S&W」の記載が無い数値が4技能の合計点

主な英語の資格・検定試験の概要

試験名	実施団体	受験人数	年間実施回数	成績表示方法	出題形式: 実施方式 (*1)	受験料
Cambridge English (ケンブリッジ英検)	ケンブリッジ大学 英語検定機構	国内人数非公開 ※全世界では約250万人	2-3回	上初級~特上級(5つ) 可否、スコア(80-230)、グレード	L, R, W: 紙 S: ペア面接	PET(B1) 11,880円~ KET(A2) 9,720円~ (*5)
実用英語技能検定	日本英語検定協会	約235.5万人 (H25実績)	3回	1級~5級 可否による表示 H27よりスコア併記予定	L, R: 紙/CBT (W): 紙 (S): 面接/CBT (*2)	2級: 5,000円 準2級: 4,500円
GTEC CBT	ベネッセコーポレーション Berlitz Corporation ELS Educational Services ※一般財団法人進学基準研究機構(CEES)と共催	非公表	3回 (H27)	0-1400点	L, S, R, W: CBT	9,720円
GTEC for STUDENTS	ベネッセコーポレーション Berlitz Corporation ELS Educational Services	約73万人 (H26実績)	2回	0-810点	L, R, W: 紙 (S): タブレット(*3)	3,080円 L, R, W (5,040円 L, R, W, S)
IELTS	ブリティッシュ・カウンシル、 ケンブリッジ大学英語検定機構 日本英語検定協会 等	約3万人 (H26実績) ※全世界では240万人	約35回	1.0-9.0 (0.5刻み)	L, R, W: 紙 S: 面接	25,380円
TEAP	日本英語検定協会	約1万人 (H26実績)	3回	80-400点	L, R, W: 紙 S: 面接 (*4)	15,000円
TOEFL iBT	テスト作成: ETS 日本事務局: CIEE	非公表	40-45回	0-120点 (4技能を各0-30点で評価)	L, S, R, W: CBT	230USドル
TOEFL Junior Comprehensive	テスト作成: ETS 日本事務局: GC&T	非公表	2-3回	0-352点	L, S, R, W: CBT	9,500円
TOEIC	テスト作成: ETS 日本事務局: IIBC	約236.1万人 (H25実績) ※TOEICプログラム全世界700万人	10回	10-990点 (L, R各5-495点)	L, R: 紙	5,725円
TOEIC S&W	テスト作成: ETS 日本事務局: IIBC	約1.5万人 (H25 実績) ※TOEICプログラム全世界700万人	24回	0-400点 (S, W各0-200点)	S, W: CBT	10,260円

*1: L=Listening, S=Speaking, R=Reading, W=Writing

*2: Wは1級・準1級、Sは3級以上

*3: Sはオプション

*4: L/R, L/R/Wでも受験可能

*5: 実施試験センターにより異なることあり

主な英語の資格・検定試験の出題意図・語彙数 等

試験名	目的・出題意図	語彙数	国際通用性 ①実施国数 ②主な活用地域 ③海外団体との連携
Cambridge English (PET:CEFR B1)	英語圏における日常生活に必要なとされる実践的な英語力があるかを評価する	3,000語程度 (*1)	①約130カ国 ②英国、欧州、オーストラリア、ニュージーランド ③CaMLA(米国シガン大学)、OET(豪州)等
実用英語技能検定 (2級: CEFR B1)	英語圏における社会生活(日常・アカデミック・ビジネス)に必要な英語を理解し、使うことができるかを評価する	4,000語程度 (*2)	①約50カ国 ②アメリカ、オーストラリア、カナダ等 ③アジア6地域7団体およびCRELLA(英国)
GTEC CBT	英語を使用する大学で機能できる(アカデミックな)英語コミュニケーション力を測る	3,000～6,000語程度 (CEFR C1まで)	②北米(ELS Educational Services)
GTEC for STUDENTS	英語によるジェネラルな状況におけるコミュニケーション能力を測る	3,000語以下 ※タイプによって異なる (CEFRB2まで)	
IELTS	英語を用いたコミュニケーションが必要な場所において、就学・就業するために必要な英語力があるかを評価する	5,000～6,000語程度(*2)	①約140ヶ国以上 ②EU諸国、オーストラリア、カナダ、ニュージーランド、アメリカ等
TEAP	EFL環境の大学で行われる授業等で行う言語活動において英語を理解したり、考えを伝えたりすることができるかを評価する	2,000～5,000語程度 (タスクにより異なる) (*2)	③CRELLA(英国)
TOEFL iBT	高等教育機関において英語を用いて学業を修めるのに必要な英語力を有しているかを測ることを目的とする。	(R) 3,000語で90.45%をカバー 5,000語で95.37%をカバー (L) 3,000語で96.22%をカバー(*3)	①約130か国以上 ②英語圏(北米、オーストラリア、ニュージーランド等)、非英語圏(ドイツ、オランダ、トルコ、韓国等)
TOEFL Junior Comprehensive	英語を母国語としない中高生の英語運用能力を世界標準で評価する。	3,000語程度 98%の単語がセンター試験に出現(*4)	①8か国(実施国数拡大中、2技能については既に50か国以上)
TOEIC / TOEIC S&W	和文・英文和訳などの技術ではなく、身近な内容からビジネスまで幅広くどれだけ英語でコミュニケーションができるかということの評価する。	4,000語以上 (*5)	①約150か国

*1: English Vocabulary Profile Wordsに基づいてカウントした概算 *2: BNC(British National Corpus) *3: BNC/COCA word-family lists < 第1回連絡協議会資料より > *4: 2006年以降のセンター試験。グローバル・コミュニケーション&テストニング独自調査(2014年)

*5: 外部リサーチャーが独自に行った調査結果「英検2級より多いがテレビ、ニュース番組よりは少ない」からの推計値

◇生徒・学生の英語力向上における活用例

<高校の例>

- ○○高等学校
コミュニケーション活動を重視した授業において、英検の過去問題を活用。生徒の意欲を引き出す。受験前には、英語科教員とALTで面接指導も実施。
- ○○高等学校、○○中学校
スピーチコンテスト・ディベート大会や短期留学等の取組を進める中で、英語力向上の目標として資格・検定試験を活用

<大学の例>

- スーパーグローバル大学等事業 採択大学
入学時から卒業時における目標を設定し、定期的にTOEFL等の試験を受け、卒業時には、実践的なコミュニケーションが可能なグローバル人材を育成
- ○○大学
大学で学習する際に必要とされる英語運用能力を正確に測定するテストを導入し、基準点を設け、入学者選抜の際にすると共に、入学後の習熟度別クラス編成にも活用することで、英語力向上のためのきめ細かな指導を実施

◇入試における換算方法等（例：出願要件、みなし満点、点数加算等）の例

<いわゆる「みなし満点」>

- ○○大学（一般入試）
TOEFL iBT71点以上
TOEFL PBT530点以上
英検準1級
IELTS 4技能6.5以上のスコアまたは等級を所持している者については、大学入試センター試験の英語科目を満点とし換算して、合否判定を行う

<点数加算の例>

- | | |
|----------------|------------|
| ➤ ○○大学 | ➤ ○○大学 |
| TOEFL 48点以上 5点 | 英検2級以上 10点 |
| 61点以上 10点 | 英検準2級 8点 |
| 79点以上 25点 | 英検3級 6点 |
| 100点以上 50点 | |
- ○○高等学校
推薦入試において英検3級以上で加算

<出願要件の一部、英語試験免除>

- ○○大学
【自己推薦入試等：免除】
TOEFL68点以上（経済、商学関係）
【英語運用能力特別試験：出願要件】
TOEFL68点以上
（法学・政治学、国際関係）
- ○○大学（一般入試）
英検2級以上：英語学力試験を免除

<高校入試の例>

- 大阪府における取組
入学者選抜においてTOEFL iBT、IELTS、英検のスコア等を一定の得点に換算し、学力検査の英語の得点と比較して高い方の得点を学力検査の得点とする（平成29年度より開始）